

自己表現ワークショップの概要

山 口 真 人（南山短期大学助教授）

この特集の中で報告される実践活動は、南山短期大学人間関係科の総合実習として、1985年12月9日から14日までの5泊6日間、中央アルプス八ヶ岳の東麓に位置する山梨県清里KEEP協会清泉寮で実施されたワークショップ合宿の記録である。

人間関係科でのワークショップ形式の合宿は1976年度より始まっており、1985年度で10年目を数えている。ワークショップのねらいと内容を見てみると、初期の頃は学内授業では時間やスタッフが不足して実施できない、KJ法、リーダーシップ、TA、チームワークなどのスキルトレーニングが強調されていたが、次第に学生も教員も自由に選択できる自己啓発へとねらいが変化して、演劇、ダンス、絵本作り、読書、自然観察や野外生活、絵画や版画、オイリュトミー、陶芸や木彫、歌づくり、聖書に聴く、社会問題、価値の明確化、ビデオ制作、民話や民俗の採集など、参加教員の多彩な関心領域から様々なプログラムが工夫されるようになった。また、参加条件も学年単位での全員必修制から学年混合の選択制へと大きく変化してきている。

1985年度は夏冬2回のワークショップ合宿が実施された。今回報告されている冬のワークショップ合宿は特に最後に発表会を行うことを前提にして計画され、表1の6つのワークショップが開かれた。

合宿参加者へのオリエンテーションは合宿の3週間前に行われた。6つのワークショップの担当者がそれぞれのねらい・概要・定員などを紹介し、学生は自由に選択した。希望者の片寄りが生じた際には担当者や学生が相談しながら調整を行ったが、1年生（34名）と2年生（31名）の混合比率はワークショップによって大きく異なってしまった。学生の宿泊室は、ワークショップ毎に活動

時間のずれがあるため、ワークショップ毎にまとめて確保された。

ワークショップのための準備期間は3週間であり、毎週1コマ(90分)は総合実習の学内授業として、各ワークショップの必要に応じて事前準備が行われた。準備にはワークショップの内容面での事前学習や必要機材の調達や荷造りなどが含まれており、学生は各々が役割(代表者、荷物係、生活保健係、記録係など)を持ちながら準備を進めていった。

表1 実施したワークショップの一覧

| ワークショップ | 担当者 | 学生数 |
|-----------------------|------------|-----|
| 1. 『私の仮面(マスク)作り』 | 木村晴子 | 10 |
| 2. 『自由に踊ろう、感ずるままに!』 | 會澤俊三・伊藤千佐子 | 9 |
| 3. 『クリエイティブ・ペインティング』 | 山口真人 | 15 |
| 4. 『オイリュトミー』 | グラバア俊子 | 10 |
| 5. 『情熱とスペイン舞踏—感情と表現—』 | まどか庸代 | 8 |
| 6. 『絵本づくり—誕生—』 | 文珠紀久野 | 12 |
| | | 計64 |

各々のワークショップの準備と同時に、合宿のプログラムの中の全体会の時間(開会式、朝の集い、中間交流会、発表会、閉会式など)の実実施計画の立案と運営が各ワークショップで分担され、学生はそれらの準備を行いながら、合宿という場の組織作り(オーガナイズ)をも体験的に学んでいくことになる。

12月の清里には白銀の世界が広がっていた。会場としての清泉寮はその木造のホールや炎の燃える暖炉を特徴としており、オイリュトミーのための本館ホールやダンスのためのアンデレホールはワークショップの会場としては自然を感じさせる良い環境を提供していた。スペイン舞踏のためのハンターホールは木の壁とリノリウムの床を持っており、これも会場としては充分であった。ペインティング、仮面作り、絵本のための会場は参加者数に比して狭く、特に仮面と絵本の会場はそれぞれ畳の小部屋2部屋に分かれたため、ワークショップの運営に大変苦労があった。

合宿の日程の全体的な枠組みは表2に示した。第3日の午後の交流会と第5日午後からの発表会以外はワークショップ毎の自由な運営にまかされた。

今回のワークショップ合宿に対して最初から「自己表現」という言葉が使われていたわけではなく、そういう意味では全てのワークショップが今回の特集のテーマである「自己表現」に合わせて設計されたわけではないことを断っておく必要がある。にもかかわらず、各々のワークショップのねらいとその成果は自己表現という視点から見ても大変意欲的で斬激的な試みであったと評価できる。



「私の仮面づくり」



「オイリュトミー」



「自由に踊ろう、感ずるままに！」



「情熱とスペイン舞踏」



「クリエイティブ・ペインティング」



「絵本づくり」

表2 合宿全体の日程

| | 第1日 | 第2日 | 第3日 | 第4日 | 第5日 | 第6日 |
|-------|----------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|-----------|
| 8:00 | | 朝の集い | 朝の集い | 朝の集い | 朝の集い | 朝の集い |
| 9:00 | | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 |
| 12:00 | 出発 | WS ₂ | WS ₅ | WS ₇ | WS ₁₀ | 片付け 閉会 |
| 13:00 | | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 |
| 18:00 | 到着 開会 | WS ₃ | 交流会 | WS ₈ | 発表会 | 出発 |
| 19:00 | | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | |
| 21:00 | | WS ₁ | WS ₄ | WS ₆ | WS ₉ | 発表会 |
| | | | | | | |



ワークショップ1

私の^{マスク}仮面作り
ペルソナ

木村晴子（南山短期大学助教授）

<はじめに>

「私は人からはよく〇〇〇と思われているが、実際はそうではない。×××という側面がある」——学生がしばしば授業の個人面接の際などに口にする言葉である。そのような時，“他者の知らないその人の内面”について話しあうと同時に，“他者がこう見るという、その人の顔”についても話題にし、「そんなふうに見せているのも自分自身であるし、他の人があなたをそう見るという事実は無視できない。それをどう捉えるか、他者がそのように見る自分の部分も大切に」といった話をすることがある。多くの場合、他者が見ている自分とは、“やさしい、しっかりしている、まじめそう……”といったポジティブな側面であり（もちろんその逆もあるが）、そのように見られることがうれしくもある半面、彼女らは“本当の自分”とのギャップに複雑な思いを抱いているのである。

ペルソナとは、本来は劇の中で特定の役を演じるために役者がつける仮面のことであり、person や personality も同じ語源による。ユング心理学においては、人間が外界に示すその人の見せかけの顔や姿、行動などのことをペルソナとして、比較的わかりやすい元型（arch type）の1つに加えている。ユングによれば、ペルソナとは「1人の人間がどのような姿を外界に向かって示すかということに関する、個体と社会的集合体との間の一種の妥協である」とされ、人間は1つのみでない、多数のペルソナを持ちうるし、それを使いわけることで、健康な社会適応が可能になるのである。しかしまた、ペルソナの部分のみが強調され、その人のすべてを覆いつくすようになれば、常に外への役割意識のみで生きる、いわゆる“脱げない仮面”の持ち主になってしまうこともある。さらに、本来の自分を無理に押えて、不自然にペルソナを作りすぎ

て、にせの適応にエネルギーを費すこともあり、そうしたことが神経症的な症状の発生へと進むひきがねとなることもある。

今回のワークショップでは、こうした「自分がつけている仮面」に焦点をあて、それを実際に作ってみることで、自らのペルソナに意識的にこだわり、それをめぐっての自己理解を深めることをねらいとした仮面作りを試みた。自らのペルソナがどのようなものであり、それをつけていることがどんな意味を持つのか、また、自分では気づかずにかぶっている仮面の部分を、グループ作業の中で意識化していくことも含めて、1週間の制作作業を計画した。

<活動の過程>

今回の活動は、合宿出発前学内にて2回の時間を持ち、その後5泊6日の合宿の中で作業を進めた。その過程を順を追って次にまとめていく。

Step. 1 グルーピングのためのねらいの提示（学内）

合宿でどのグループを選択して参加するかを決めるため、次のようなプリントを配布して参加者を募った。

グループ名「私の仮面づくり」

<すること>

- 自分の顔をよく研究して「私の仮面」をいくつか作る。
材料：和紙、新聞紙、粘土、針金 etc.
- 自分をあらわす仮面を使って何らかのパフォーマンスを行う。
又はその仮面と自分との関連の中で、自分をめぐるストーリーを作って展示する。（展示、発表のしかたは相談して決める）

<次回までに>

- 自分の顔とそのイメージを考え、出来れば数枚の自画像（具象、抽象、図案化など）を描いてみる。
- どのような仮面を作りたいか、自分の何を、どう表現したいかをイメージし、考えてしておく。
- お面の作り方、アイデア募集!!

以上のような提示に対して11名の参加希望のメンバー（1年生5名、2年生6名）が集まった。さらにこのメンバーに対し、仮面の意味について多少なりとも予備知識を持っておいてもらうため、ユング心理学関係の解説書からペルソナに関する部分を抜き出し、コピーしたものを配布して、読んでおくように指示をした。

Step. 2 ねらいの提示（以下合宿）

ここより、雪の八ヶ岳の山ろく、清里清泉寮にての活動に入る。

セッションを始めるにあたり、仮面作りグループのねらいと大まかな手順を

説明，確認した。提示したものは次のとおりである。

<ねらい>

- 私のペルソナ（外界に対してつけている仮面）はどんなものであるのかを考え，それをあらわす仮面を制作する。
- 「私の仮面」をつけ，それにふさわしい何らかのパフォーマンスを試み，自らの中に生ずる感情に気づく。
- これらの活動を通して自己理解を深める。

<手順>

- 1) 私のペルソナについてのイメージを出しあう。
(私自身から－メンバーから)
- 2) 上のイメージから，仮面のデザインを考える。(いくつでも)
- 3) 仮面の制作
- 4) パフォーマンスのやり方について，グループで検討，実施
- 5) ふりかえり

最後のパフォーマンスについては，今回の合宿そのものが最終的に発表活動を行うもの，との大枠があったために計画に入れたものである。単に作ったものを見せるだけでなく，それをういて何らかの演技的なことをすることは，ひとつの冒険でもあり，また，いわゆる“パフォーマンス”が流行の時でもあり，若い学生たちには楽しみもかねてのしめくりとなるにふさわしいと思われた。

この折の話しあいにおいて，11人のメンバーの中には，ものを作ることが好きで，手作業に没頭することを主にしたいと，パフォーマンス部分にしりごみを示す者もあり，また逆に，最後の発表で“踊る”ことを楽しみにする者もあることが表明され，それぞれの「やりたいこと」と「挑戦してみること」が少しずつ提出されてきた。

Step. 3 自己紹介とイメージ交換（グループ）

ねらいの提示に続いて，自分のペルソナイメージを考える材料にするため，次のような項目について，メンバー間でイメージの交換を行った。

私のペルソナ・イメージ

| メンバー | たとえるもの | 色では | 形では | 言葉では |
|------|-------------|-----|-----|------|
| | 私は…… | | | |
| | 1) _____さんは | | | |
| | 2) _____さんは | | | |
| | 3) | | | |

筆者を含む12名のメンバー間でそれぞれについてのイメージを書き出した後、各人について、残りの11名がその人を色、形、言葉であらわした印象を伝え、当人は自分が他のメンバーからどんな印象を持たれているかのデータを得た。こうした「印象ゲーム」は、人間関係科の授業の中で時折自己理解の1つの側面として行われることがある。たとえばものはこの項目の他、動物、植物、食べ物、楽器など、さまざまであるが、単純な作業であるにもかかわらず、自分についてのこうしたフィードバックは想像以上にその人の心にいろいろな思いを起こさせるようである。他メンバーから自分についてのデータをもらった後、それについての自らの感想を述べることで、この作業は実質的にお互いの自己紹介をかねたものになった。

Step. 4 土台作り（個人作業）

以上のような準備作業の後、自分の作りたい仮面のデザインを各自が考え、面の土台の制作にとりかかった。

面作りの方法は、基本的には工作用面芯に新聞紙をいく層にも重ねてのりづけし、途中、紙粘土、綿、針金などで、鼻、ほお、口、あごなど、顔の肉づけを工夫しながら、最後は和紙を貼り重ねて表面を仕上げるという方法をとった。芯にするものは面芯の他、ザル、皿など、好きなものを用いた。作り方については当初、木彫りで能面のような良い面を作りたく思ったが、技術的、日数的に困難であると思われたため断念した。筆者に面作りの特別な技術や知識があるわけでもなく、完成後、顔につけて動くために、軽くこわれにくいものにする必要もあった。したがって、今回の制作方法は事前に試行錯誤を重ねてみて最も適当と思われたやり方である。

適度の厚みと形に仕上がった土台は、生乾きの時に面芯をはずし、目や口の部分に穴をあけ、完全に乾燥するのを待った。

この段階は作業自体は個人作業であり、1部屋に集まった12人が黙々とハケでのりをつけては貼ることをくり返した。

Step. 5 ユング心理学勉強会（グループ）

面の土台が乾くのを待つ間、合宿出発前に配布したプリントを材料に、ユング心理学に関する、入門程度の勉強会を持った。

ペルソナに関する概念を知ることから始めて、ユング心理学における主な概念や考え方などを、主として筆者が中心となって説明しながら、各人が疑問を出しあい、自由に話しあった。メンバーの学生たちは心理学を専門に学んでいるわけではないため、あまり専門的な理論に入らず、できるだけ各自の自己理解に結びつくよう留意しながら、夜の2時間半のセッションを持った。

Step. 6 土台発表（グループ）

乾燥して一応の形が出来た土台を持ち寄って、それをめぐって制作の意図、感想などについて1人ずつが発表し、意見の交換を行った。白い形だけであっても奇妙に制作者に似ているものもあり、不気味なもの、ユーモラスなもの等、

楽しくお互いの作品を鑑賞しあった。

Step. 7 着色・仕上げ（個人作業）

着色は水彩絵の具で行い、上から工作用ニスで仕上げをする。淡彩でまとめる者、油絵のようなタッチで着色する者、デザイン風に描く者など、ここで各自の面は急にそれぞれの個性を持ち、作者の意図に従って生きてきたようである。この頃になるとグループのメンバーもお互いによく知りあい、仲良く談笑しながらの作業になった。なお、作業の進み方に個人差が出るため、このころに自由時間をかなり入れ、雪山を眺めながらの散策に出かける者もあった。

Step. 8 仮面の紹介とネーミング（グループ）

着色して仕上げた仮面を持ち寄り、再度自分の面の紹介を行った。同時に自分の作った仮面についての記録とネーミングを次のような形式にまとめさせた。単に作るのみでなく、自分の制作したものの特徴、傾向をその意味づけとともに言語化して記録し、確認しておくことが必要であると思われたからである。ただ、仮面のネーミングに関しては、いまひとつ深くつっこんだものをイメージすることが難しく、表面的なものに終わった者が多いようであった。自らの深い部分にかかわらせてのネーミングは、メンバーに紹介するものとしては表現困難であったのかもしれない。

私 の 仮 面

| | 仮面の形、色、表情など | それであらわされる私 (あらわしたい) | 仮面の名前 |
|---------------|-------------|------------------------|-------|
| 仮面 A | | | |
| 仮面 B …… | | | |

Step. 9 発表会（グループ）

パフォーマンス部分は学生たちの企画にまかせ、筆者も1メンバーとして参加した。自分の面をつけた各人が、首だけを出して足もとまで被い隠す黒の布地を身にまとい、薄暗くした細長い廊下にさまざまなポーズをして立っているのを展覧会風に見物してもらう“静”の部分。続いて現代風の音楽にあわせてグループで踊る“動”の部分。何やらおぼげ屋敷のような風情ではあったが、若い学生たちはそれなりに楽しんでいる者が多かったようである。面をつけることで大勢の前で大胆な動作で踊ることに没頭できるという体験をした者も多いようであった。しかしまた、面をかぶっていてもなお、こだわりがあって自由にふるまえぬ自らを確認した者もあった。

Step. 10 ふりかえり（グループ）

発表会が終了した日の夜、作業のまとめとしてのふりかえりの時間を持った。ふりかえり用紙は、作業のステップの順を追って記述するように、次のようなものにした。

〔仮面作りふりかえり〕

- 1) 自分についてのイメージをメンバーから伝えてもらって
私は _____
- 2) 自分の仮面のイメージを考えると、
私は _____
- 3) 仮面の形、土台を作るとき、
私は _____
- 4) 仮面に着色するとき、
私は _____
- 5) 仮面に名前をつけるとき、
私は _____
- 6) 出来上がった仮面に関して
私は _____

以上に記述したことから

- A) 自分の仮面を作ることで自分について気づいたこと、わかったことは……
- B) グループメンバーの仮面作りをみて、気づいたこと、わかったことは……
- C) その他、今回の合宿を通しての私は……

この用紙に個別に記入した後、各項目ごとに内容を発表しあって、最後のグループ活動とした。

日 程

以上のステップは次の時間枠で行われた。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|-------------------------------|-----------------|-----------------|----------------------------|--------------------------|-----|
| AM | | Step. 4 土台作り | Step. 6 土台発表 | 着 色 仕 上 げ | Step. 9 発表会 準 備 | 閉会式 |
| | | 自由 | 自由 | 仕 上 げ & 自 由 | 同 上 | 食 事 |
| PM | 到着 開会式 | 土台作り | 交流会 | | 全体発表会 | |
| | Step. 2, 3 ねらい提示 イメージ交換 | Step. 5 勉強会 | Step. 7 着 色 | Step. 8 出来上り紹介 ネーミング | 発表会 Step. 10 ふりかえり | 全体会 |

＜学生の反応—ふりかえり用紙より—＞

自分の仮面作りをめぐる学生の体験や反応はさまざまであった。その一部をふりかえり用紙の記述よりとりあげてみる。

- 1) 自分についてのイメージをメンバーから伝えてもらって、私は……
 - “はっきり”した印象を与えているらしい。反面，“やわらかい”印象も与えているらしい。自分の予想通りの“仮面像”が返ってきた。(良し悪しにかかわらず)(学生A) (注)以下B, C, D……はメンバーである。
 - けっこういろいろな面を持っている。八方美人なのかしら?とってしまいました。が、いろいろなイメージを持たれる方が楽しくていいわ!(B)
 - やはりと思い、また意外と思った。外から見られている自分のイメージと、自分が自分と思っているもののギャップがかなりあり、予想していたこととはいえ、気が重くなった。(C)
- 2) 自分の仮面のイメージを考えると、私は……
 - メンバーから出されたいろいろなイメージを、自分自身の中のどういうイメージにあてはまるのだろうかと考え……でも好きなものを作ろうと思った。(B)
 - 人の中でみんなを楽しませ、笑わせるピエロのイメージがわいてきました。そして、いつもチャーチャーさわいでいるおまつり人間を表現しようと思いました。(D)
 - ふっくらしたイメージの面と、それを冷たくみつめている面を作ろうと思った。私はとにかく、外へは派手に自分を表わしていることを、作りながら感じていた。内側のイメージの面を考えるのは、触れたくない自分という感じで、少し逃げてしまった。(E)
- 3) 仮面の形、土台を作るとき、私は……
 - 自分の顔の特徴を強調して肉付けをしました。漫画みたいな感じの顔の輪郭になってしまったが、変に自分に似てしまってびっくりしました。もうひとつは私のあこがれの対象である“美人”を表現しようとして、紙粘土などで補強して作ったのですが、ものすごく冷たい顔になってしまって不気味でした。(D)
- 4) 仮面に着色するとき、私は……
 - おまつり人間であることを意識して、明るく、あざやかな色ばかりをもちました。別のものは、私が第1印象でもたれた色のイメージで、異質だったものだけで、組みあわせて作りました。(D)
 - 自分の思っていたイメージと違った色になってしまったが、できあがってみると案外満足できた。色をぬってはじめて自分らしい仮面になった。(F)
- 5) 仮面に名前をつけるとき、私は……
 - 「サリアンちゃん」という、外への面の名前はぱっと見てすぐに決まった。心の中があっただかくなった。もうひとつの方はちっとも思い浮ばず、やけくそだった……「工場長?」(E)

- 愛着を持って、理想とする名前をつけました。(G)
 - 名前をつけられませんでした。どんなに考えても浮かんでこなかった。名前をつけるとそのイメージに限定されてしまうようで、いやだったせいかもしれません。(H)
- 6) 出来上った仮面に関して、私は……
- できるなら手もとに置いておきたくないと思った。自分の“業”がしみついているような気がして……(A)
 - 自分に似ている方の仮面にはものすごい愛着を感じて、みつめるたびに頭をなでてしまうほど気に入っています。もうひとつのきびしい顔の仮面は、手間ひまがかかったわりに愛着がわきませんでした。それが意外。(D)
 - とても愛着がわき、大好きであります。(G)
 - 不思議なことに、なぜかあまり愛着がありません。(H)
 - 自分に似ているといわれて驚いた。もう少し表現しきれない部分が残っているが……けっこう満足しています。(F)
 - 自分に似ているといわれた仮面が、それまでは自分では印象に残らない淡白な仮面だったのが急に意識しました。手もとに置いてみつめてみようかと思う。(I)
- A) 自分の仮面を作ることで自分について気付いたこと、わかったことは……
- 仮面を何枚も何枚もつけていて、めくってもめくっても“自分”らしきものへたどりつけなくて、しかもその仮面1枚1枚が全部“自分”だということ——しかし、人や状況によって仮面をとりかえるという感覚とは違う。(A)
 - かなり自分を押えているのではないかと思った。(C)
 - 私は敵を作ることを極端に嫌うため……(中略)……必死になってピエロ役を意識的、無意識的に演じていたことを再認識しました。そして、もう一方の美形のお面は、私のあこがれて作ったのですが、実際はものすごく冷やかで、薄情な、はっきり言って嫌な顔になってしまいました。そして男の顔になってしまったのが不思議でした。(D)
 - にこやかな表情よりも、冷たい表情の面の方が私に似ていると言われ、人に対して冷たい表情をみせがちな自分に気付いた。(F)
 - ……(中略)……また、自分がいつもペルソナをかぶっていて、それを嫌悪していた時期、思春期のことですが、そのことがなんだか思い出されてしまった。しかし、今の時点で、ペルソナをかぶることは社会の中で生きていく以上、しかたのないこと、むしろ必要なんだと思い始めている自分を発見した。(H)
 - ……(中略)……自分を冷静にみることができるようになったのは初めてで、ずいぶん客観視できるようになったと思う。(I)
- B) グループメンバーの仮面作りをみて気づいたこと、感じたこと……
- みんな柔軟な感性を持っているんだな……それ故にギャップを感じることもあるんだらう……(A)

○最初は勝手気ままに作っているようにみえたのに、実際その仮面の意味を聞いてみるとそれぞれに深い意味が隠されていることを知らされた。みんな自分を知らうとか、発見しようとかいう意気ごみをもってこの仮面作りにのぞんだのだな、と感じました。(D)

C) その他、今回の合宿を通しての私は……

○“仮面”というのは私にうってつけのテーマだったので選択した。“人の顔”を作るということで“人間”の生き様を演じるということ。“人の顔”をつけるということで“人間”を演じるということ。みんなが形や表現は違えども同等にしているんだな……と思った。“仮面”をとり去って“人間”というものが存在できるのだろうか。“仮面”をとり去って生きられたら……どうなんだろう。Personaを“人格”ととるなら，“仮面”がなかったら人でいられない……。

(A)

○自分の内面をみようとする姿勢が随所にみられるようになった。……(中略)……いろいろな人の感情に触れ、私も視野を広げ、またいろんな発見があったように思います。発表の時は仮面の中で陶醉して、ほとんど狂気のように踊っていた。

(D)

○……(中略)……途中から仮面を作る、ということに集中できた。発表の時、わりにみんなのってやれたと言っていたけれど、私は仮面をつけていてもやっぱり恥しくて、構えや照れなんかあって、今ひとつ不消化な気分だった。(I)

<総括>

学生の反応はさまざまである。彼女らが仮面作りグループに参加した動機づけも多様であった。自分のペルソナを考えてみたいという、本来のねらいどおりの動機づけを持つ者もあれば、ものを作ることが好きで“面作り”そのものを楽しみたいという者もあった。また、ダンスなど、かなり激しく体を動かす必要のある他のグループを敬遠して面作りを選択した者も中にはあったようである。とにかく、各自がそれぞれの面作りを楽しみ、その過程で自分の“顔”を意識し、それなりの気づきを得ることができたといえる。

意識しないで作った面が、その作者の生き方や問題点を雄弁に語っているものもある。例えば、「人を笑わせることに一生懸命な、いつもにぎやかなお祭り人間」と自ら述べた学生Dの仮面は、その顔面にあざやかな渦巻き模様をいくつもつけており、それを見る人の目をまわさせるようであった。そのような仮面で外界との関係を持ち続けることが彼女の内面とどう関連していくのか、今後の人生においてこのペルソナはどんな役割を果していくのであろうか。こうした自らの“顔”について、Dの場合、自分自身がそのことをある程度自覚し、意味がわかって表現している点が好ましいことであった。また、面の目を針の穴程度にしか作らなかつた学生は、「自分から外は見えるが、外部から自分の中の顔はみえない」と述べ、自らの周囲に対する姿勢をその仮面で表現

した。それぞれを事例としてとりあげて、くわしく考察することは本稿ではないが、各々の仮面はその作者の生き方や問題点などを語っており、それを作ることによって1つの側面からの自己理解が深められたようである。また、出来上がった仮面について、「とても愛着があり、手もとに置きたい」とする者と、その逆の感想を述べる者があったことも興味深い。

〈おわりに——今後に向けて——〉

今回の仮面作りは筆者にとって初めての試みであり、参加メンバーの動機づけに個人差があったりして、反省すべき点も多い。今後同じようなねらいのグループを運営していく際には次のような側面をさらに改善していく必要があると考えている。

1) 仮面の制作に入る前の知的な学習部分を増やし、ペルソナの意味の理解をもっと明確にしておく。さらに、自分のペルソナを考えるための時間、活動、作業などを、制作に入る前にもう1～2ステップ追加する方がよいかもかもしれない。自分の考え方、感じ方、行動様式、対人関係の持ち方などを言語化し、確認する作業をした後、それを表現するような仮面のデザインをしっかりと考える。今回はこの合宿の直前に筆者が別の合宿授業にも参加して不在であったため、事前の活動時間に相当の制限があったことが残念である。

2) 制作の前、途中、後の各時点において、出来れば個人面接の時間をとり、各人の制作の意図、内的な動き、気づきなどについて話しあう。その場合、筆者はセラピスト的な立場に立つことになる。今回の場合は筆者も1メンバーとして、全く同様に自分の面を制作していたため、こうした時間はとることが出来なかった。

3) 発表に関しては、他グループに“見せる”“演じる”という目的があったため、楽しむことを主とした“踊り”になったが、ねらいを自己理解に集中させるなら、1人1人が自分の面をつけ、それにふさわしい動きやポーズをつける部分にもっと重点を置くことが望ましい。そうしてみても、自分の中にどんな感情が起ってくるかを確認し、言語化してみることが必要であろう。

4) その他、それぞれの面をめぐる自分のストーリーを作って演じてみたり、グループとしての活動を増やして、各々の面を使って1つの劇作りを試みるとかいったことも考えられる。また、いくつか作った自分の仮面との対話を、エンプティージャーのような形で試みることもできよう。

× × × × ×

1週間の合宿の中での活動は、それだけ集中もできるが、時間的、物理的制限も多い。今回の活動を基礎にして、また機会があれば新しい要素を入れながら、次の“仮面作り”を試みてみたいと考えている。

ワークショップ 2

自由に踊ろう，感ずるままに！

會澤俊三（南山短期大学教授）

今なぜ『自由に踊ろう，感ずるままに！』なのか

「哲学」の講座を担当する者として、一見無関係な領域と思われる実習中心の『Discover Life in Songs』『メロディと映像を通して人生を』『人生を彫る』『感じ、表わし、生きるからだを』『創作 Jaggy』を、そして今年度は『自由に踊ろう，感ずるままに！』をと、“実年”に足を踏み入れた年齢で恥かし気もなく、奇異なワークショップを提案し続けて来たのは何故であろうか。それは「哲学そのもの」ではなく「哲学すること」を、と「観賞される」講義を捨て「舞台の上で共演する」学習の場を求めるにつれ、哲学することに不可欠な解放された精神の欠如を学生の中にますます痛感するからである。ガブリエル・マルセルは「“私”とは芝居を見ている“観客”だけではない」と言う。“私”自身は、人生という舞台に引き込まれ（engagé）私の役目を演ずるペルソナであるならば、「いかに生きるべきか」を客として観賞するのではなく、主役として私の存在を感じ、呼吸し、成長し、変容する人格であらねばならない。人間にみえることではなく、人間であることを問いつつ生きるには、精神も肉体も解放された自由な変革体としての意識を有することが前提とされるのである。それ故、萎縮された意識によって人間存在が操作されがちな現状を離れ、心と体が既存意識を超えて「自由に，感ずるままに」動き始めることを意図する集中的体験学習訓練の設定が必要となるのである。

人間存在を多様に枠付ける学校や社会という日常空間から不連続な大自然の中で、しかも木造宿舎での5泊6日は、集中して人間存在そのものの解放を試みるに適切な場となった。意識変革を為すには、先ず身体の内部感覚を封じている意識の枠に気付き、ついでそれを壊すことによって、抑圧されていた身体の内生命力を自然発生的に現出させることで、意識の枷から自然に解放される

体験を循環向上的に持ってみることが有効である。それ故、「自由に踊ろう、感ずるままに！」とは、正確なまた上手な演技をパフォーマンスすることではなく、むしろ逆に、演技の型を壊してゆくプロセスであるとも言えよう。スタッフは表現の模倣対象ではなく、またレッスンの指導者でもない。参加者が気付かず或いは気付いていても突破できない枷を敏感に認知し、また身体の内部感覚の表出を適機に介入援助することにある。それは、「まず感じ、それから動いてごらん。焦らずゆっくりと」と繰り返すことだけである。スタッフもこの集団の構成員であり、自己を解放し、より自由な自己を表現するにつれ、企画とその実践も豊かとなり成熟をみるのである。今回、スタッフとして有能な人間関係科卒業生の協力を得られたことは幸いであった。参加者は学生9名と随時参加した看護婦と事務職員の総数11名であった。

一日目

ワークショップは、夕方約1時間の「自分の参加意図と今の気持とを画用紙に描き、それを身体と言葉で表現し分ち合う」非言語一言語から成る実習体験を共有し、それをグループとして全体会で表現する開会式で始まった。これは、各人がいま自由な感情表現のどこに居るかを語るにより参加意図を明確化し、同時に相互援助関係のグループ意識を形成する第一歩を踏出すこととなった。……うまく踊りたい／型やポーズをきめたい／こだわらず無心で／快感を味わいたい／発散したい／青春したい……しかし、人前で踊るのが恥ずかしい／芸術的才能がない／技巧の下手な私／やるしかない／緊張と不安／心と体のアンバランス／常に他人の目を気にしている私……等々、描かれた各自の今の気持とねらいはセッションの期間を通して壁に掲示され、その時々での成長プロセスを自由に書き込めるものとした。

夕食後、暖炉に燃える薪のはぜる音と香りの中で、これからのセッション毎に必ず行うプリ・ウォーム・アップをする。まず、無理せずに、ただ真直ぐに、静かに立つ。体重を両足の上に均等に置くことでバランスを保ち、胃を引き締めることで背骨や腰への負担を減らし、腿やヒップを引き上げることで膝の関節を保護し、また肩をおろすことで余分な緊張を解き、背中に真直ぐな中心線を感じ、上へそして外へと大きく広がってゆく動きを感じてみる。自分にとって気持がよいと感じ、体のいろいろな部分を同時に使うことの爽快さを味わってみる。こうして、感ずるままに動くとは、そして自由で自然な感情現出とはどういうものかを自分の体で感じ始める。その後、軽く柔軟な一連の動きをしてから、互いにマッサージをし合うことで身体の触合いをもち、入浴してゆったりと体をほぐす。自分の気付きを日誌に書くことで一日を終る。

二日目

朝日に映える白銀の八ヶ岳を眺めながら、自然を身体中に感ずる深呼吸をな

し、ウォーム・アップで体も心も暖まる。全身の基礎的動舞プリエで体の内側の動きを感じながら約1時間、心地好い汗をかく。ここで、各人が型や技巧にとらわれずに思うがままに動き、発するままに声を出して室内狭しと舞ってみる。カーム・ダウンの一連の動きの後に、風呂で汗を流す。

昼食後、特製のアイスクリーム。雪の富士山が美しい。休息後、ストレッチングとフロアー・ワーク。続いて、一人が自分のメッセージを動舞で表現しながら特定の一人に伝達し、それを受けた人は自分の感受したままに受容動舞してみる。このように二人が四人、四人が八人と内面からの共感的自己表現と他者受容表現の輪が広まる。

次に、各人が「感ずるままに表現したい自分」を等身大の輪郭で紙に描き彩色してみる。……雪のように白く綺麗に踊りたい／自然の中の爽やかな気持ち／自分の中に存在するドロドロとした感情／気恥かしいが思い切り楽しく踊りたい／リズムに乗れない私／うまく動けずイライラしている私／随分大きいなと感ずる私／自分の殻を破ろうとする私／動きたい、躍びたい自分／体が伴わないが元気よく／まだ解放されていない自分／……それらを壁に展示し、各人が自分のペインティングを動舞で表現してみる。今の時点で表現したい内面の自由な感情を、互いに共感し尊重し援助し合うグループの信頼感の高まりを感じずる中で、いよいよグループとしての創舞へ向けて動き出す時機が熟してきた。まず、5人グループで、各人の身体表現をグループとして自由に感ずるままに一つの踊りにしてみる。ついで、2つのグループが互に踊りを披露し、フィードバックし合う。

夕食後、全員でいろいろなフォーメーションで動舞してみる。縦に8歩の走り—4歩の歩み—次に何かをゆったりと身体表現してみる。横に4歩—後に4歩—次に何かを爆発的に身体表現する。3方面から中央に向けて喜び・怒り・調和を交互に身体表現してみる。学生達の自由な相互介入の動きが始まり、多様なグループ動舞が創作され、壊され、また創作されてゆくプロセスの楽しさを全員が感じ始める。

三日目

この時点で、各自がどのように自由に、感ずるままに踊りたいかを文章化し、分ち合ってみる。……ジャズダンスを皆で感ずるままに振付けして踊りたい／全体から出てくるものを全員でやりたい／各自の個性や独創性を出し合ってみたい／テーマを決めハーモニーのとれたパフォーマンスを／即興でなく、よく練習して各人の動きを全体の中に組合せて／曲と一緒に選定し、自分の感ずるものを自由に踊り、しかも全体としてまとまった雰囲気でも……等々、グループ全体として「自由に踊ろう、感ずるままに！」何かを表現してみたい感情、共に成長してみたい意欲が表明された。しかし、ここで焦らずに、個人としてグループとして、じっくりと内面からの願望を味わい熟させるため、残りの午前

のセッションは練習室を出て、雪景色の美しい八ヶ岳の林を“自由に、感ずるままに”散策し、心身のリフレッシュにあてた。町まで買物に出掛け、樹木の小道で体から自然にでる喜声を挙げ、また雪の放牧場を走り舞って解放感を満喫した。

昼食後、2グループで、それぞれ、3分程度のダンスを創舞してみる。動舞したことが自分の中に届いたか、相手の内部感覚に呼応したかのフィードバックをし合う。

交流会。風船バレーボールで優勝し、グループの凝集性が高まり、共に夕食会を楽しむ。いよいよ、全員で一つのダンスを創作する方向でグループの意気も高揚してきた。

四日目

ウォーム・アップ、プリエ、ブラッシュ、バッセ。そして、全員で波の上下左右の練り、対照交差の動き、ゆっくり、早く、大きく、おおざっぱに等々、各人の内面からほとばしり出る願望のままに動舞が創られ、繰返された。一汗かいた後、各人が自分の感ずるままに16拍+1動作を創舞し、フィードバックを重ねているうちに、全員での一応の創作ダンスの輪郭が吹き上っていった。

昼食後、創作ダンスの構成が全員の気持の納得するまで繰返され、明日の舞台発表の打合せが持たれた。そして、夕食後、夜を徹して、全員が一体となって、音楽を選曲しながら更に振付けが練られた。この時点でスタッフが払うべき最大の配慮は、「見せるため」の演技や「発表のため」の振付に堕しないようにすることである。また、「出たがり症」に浮かされないよう手綱を締めることである。上手に格好よく見せて賞賛を獲得するためにはではなく、各人のそしてグループ全体の内側から噴き出る「その時その場での感ずるままを、自由に踊る」よう集中させることである。舞台発表は自分の身体の内部感覚を封じ込めている枷を断ち切る絶好の場となり機会となり得るのである。このため、等身大ペインティングを用いて自分の今ここを確認し、人前で自分を宣言してみるワークの導入は大いに援助となった。

五日目

午前中、舞台発表に向けての通し練習。

午後、等身大ペインティングを壁から下ろし、各人が表現したい課題と自分の名前とを記入した。……雪がとけてしまうほど熱く／内なるエネルギーを出しきる、若さの証明！／挑戦／感情の波／元気だぞ！／躍！／大自然／まだまだ若い！／人前で踊るのは恥かしい、けど、楽しく感ずるままにあれば、それでよし／等々、精一杯自分を表現してみたい課題を自分自身に語りかける今ここの言葉となった。

発表会。先ず一人一人が等身大ペインティングを掲げて、今ここで解放した

い自分を表明する。スポットライトの中で、もう逃げ込めない、やり直しの利かない、やるしかない場に体を置いた自分をひしひしと感ずる。熱い緊張と不安の一瞬。音楽が鼓動に共鳴する。自然に体が前へ舞台へと流れ出す。もはや自分という意識はない。動舞。相手を受け入れ自分が受け入れられている体と体の呼吸、躍動する心地好き。振付けのない各人がその場で創踊するセッションにも燃え、また先生達を踊りの輪に呼び込む自由な雰囲気も盛り上がり、手拍子のうちにフィナーレのコーラスライン、そしてスポットライトの狭まりゆく中で、グループとして個人として、そのものに成り切った一体感、信頼感、引摺って来た何かかふっ切れた解放感、そして自由に、感ずるままに踊り終えた満足感を味わっていた。

六日目

ふりかえりのセッション。／クラシックバレイから抜け切れない自分、正しい型と既成のシナリオと音楽に合わせて演技する以外に出ないでいる自分に気付く……型にとらわれず、内面から感ずるままに表現する躍動の喜びを感じた。一生踊りつづけたい。グループで踊っているほうが楽しかった。個人だけでは出し切れない迫力とかが出せるから。／踊る爽かさ、踊る生き甲斐を感じ表現した。恥かしいのも快感。型ではなく体が要求するままに踊ることが大切。美しい線とは、単純な線です。／自分では説明できないドロドロとしたものが、だんだん怒り、悲しみ、喜び、諦めといった感情となって表れてきた。必死にうまく踊ろう、自分らしく踊ろうと苦悩していた。人前で話すことはある程度自信はあったが、体で表現することには少なからず抵抗があった。……それも徐々に気にならなくなり、発表会の時は全く気にならなかった。リズムなんてかまわない。元気に明るく楽しく踊ればよい。踊ることのうまい下手なんてない、と実感した。／思い切って、楽しく踊りたいが、人の前で踊るのが恥かしい気持。……だんだん、個人でもグループでも感ずるままに踊ることができた。個人では激しい動きよりも、腕の線などを綺麗に表現するのが好きな自分を見出した。グループでは調和とコントラストを考えて踊った。人が見ているとか居ないとかではなく、悲しいなら悲しく楽しいなら楽しく踊ること。／演技のない、音痴でリズムに乗れないマスケゲームしかできない自分を情けなく恥かしく実感した。……しかし、チャボ踊りのような他の人が考えないような動きが自分らしい一番自然な動きであるように思う。一人では萎縮して絶対にできないが、グループで踊るほうが楽しく気分的に楽で、集団行動をとる方が好きな自分を確認した。／ふてくされることなく、元気に若々しく無心でダンスに打ち込めればいい。顔（表現）が真剣で、頭の中がダンスに集中している時の動きが一番自分らしい自然な動きだと思う。個人の時は好き勝手なめっちゃくちゃな動作になることが多いが気は楽でリラックスできる。グループの時のほうが、集中力も増し、必死になる。皆で踊ってバシッと決まった時の快感は言うまで

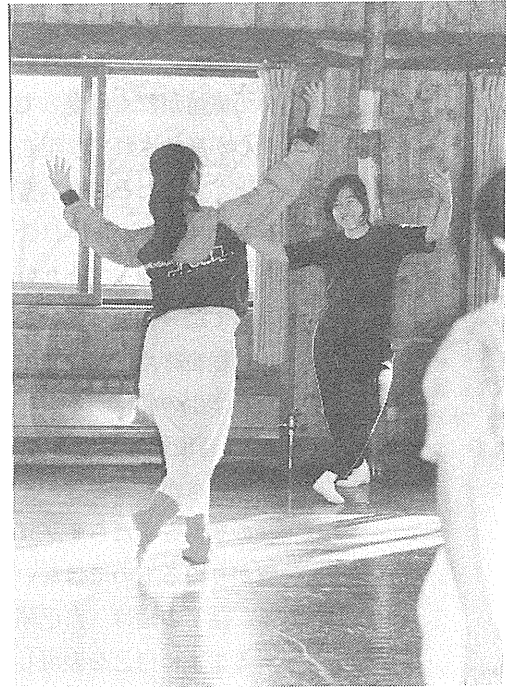
もなし。／自分で作った踊りにはこんなにも自分の特徴とか性格が現われて来てしまうものなんだなあ、と感心した。自分が気付いていなかった、気付いていても表面には出すことのなかった自分を表現できた。／音楽に拘束されないで踊るのが好き。まだまだ自由に感ずるままにはないけれど、やっているうちに楽しく身軽になった自分があった。／技巧にこだわり動けずイライラしていた自分。……今の自分はこれではないとはっきり感じた。3日間のうちに自分の気持が驚く程変わってきて、自分でも不思議だった。キリキリと縛られていたのが解放されて、現在の自分、自分の持っているものを恥かし気もなく出すことができたと思う。普段は隠しているものを人前に晒しているという気持の苦しい体験が、後半は受け入れられている自分（メンバー）というものがあつた。自分が踊ってみたいと思ったイメージを他人からの借物コピーではなく、自分で踊っている自分を見つめながら作り上げた動きで表現すること。等々。

日程を終え、朝の光の射し込む練習室の日溜りの中で、ワークの体験を語り合う学生の顔は明るい。「私の中に感情がこんなであったとは思ってもいなかった」「普段知っている自分、学校や社会の中で成り立たせて来た意識を超えて体が動きだしたとき、これが自分なんだという実感」、そして、これら人間存在の変容をもたらすプロセスが実は心地よいものであり、それが今後の成長に繋がり得るものではないか、との期待と自信を少なからず抱いていたようである。話しの輪は、自己開示と受容の暖かい信頼関係の雰囲気となり、自由に感ずるままに自己を表現し得る対話の場となっていた。

ワークショップを終えて

自由に踊ろう、自分の内側で感ずるままに！。外見上の模倣ではなく、内面を充実させることが重要である。体の内側で起こっている精神的、肉体的な動きこそ、私たちが目で見ているものを動かし色づけしている根源なのではなからうか。このことを概念的にはなく、実感的に認知したときに、全く新しい次元が開けてくるものようである。技巧は肉体に反した動きを要求することではなく、むしろ、肉体に問いかけ、肉体と協調して動かねばならないということである。もし体がこの運動は正しいと感じたとしたら、それは外見的にも美しい動きをなしているものである。体は徐々に生命力を回復し、柔軟な感情表現を増し、より自然な、自分の体らしさを自覚する。人間存在に対する自信も生まれ、個性のきらめきを表現できるようになる。自分自身を解放し、自分のもっている可能性に気づき、感ずるままに今ここの自分を自由に表現し対話し得るようになるのではなからうか。企画した者として、上述の仮説を十分にワークし得たという実感はない。「もっとガンガン汗がしたたる程やりたい」「体がそこまでいっていない」という感じが残っているからである。思うにこの種のワークには2週間程度の日数が必要なのではなからうか。更に今後の企画として、もっと汗を流し床を踏み叩き内面から発する肉声のリズムで動舞し、

もっと激しい悶えと、それを突破する過程での仲間との闘いと支え合い、を意図するワークショップがあってもよいのではなかろうか。



ワークショップ 3

クリエイティブ・ペインティング

山口 真人（南山短期大学助教授）

小さな子供にとって“絵を描く”ということは無上の喜びとっていいでしょう。子供達の前にクレヨンと画用紙を出して、何でも好きな絵を描いていよと言った時の子供達の顔は素晴らしいエネルギーに満ちています。彼らの描くどの一本一本の線も本当に個性に溢れ、ひしゃげた細長いまるの中に点の目が生まれ、ぎゅっと曲がった線が口になった途端、そこには生き生きとしたパパの顔が踊っているというわけです。どの一本の線も大人が描くような無味乾燥な線ではなく、たどたどしい線の一点一画にエネルギーがあふれ、味があり、思わず見る者の顔をほころばせてしまうのです。子供の手からは魔法のように生きた線が生まれてくるといってもよいほどです。

ところが大人の前に同じ様にクレヨンと画用紙を出したときの反応はどうでしょうか。「何を描いたらいいのだろう?」「見られると恥しい」「うまく描けないからいやだ」といった反応が大部分です。首尾よく描き始めても、ちょっと失敗したといっちは消してみたり、新しい紙に描き直したり、漫画の主人公を真似て描いてごまかしてしまうこともしばしばです。子供のときに持っていたクリエイティビティ（エネルギーや欲求を自由に表出する能力）は、大人になる過程で自分の中に閉じ込められてしまったとしかいいようがありません。残念ながら“大人になる”ということは自由な表出を妨げる内なるシールドを身につけることのようなのです。

このことは何も絵を描くときだけに限ったことではありません。私たちが人生を創造していくとき（生きていくとき）にも同じことが起こっているといえます。それ故に、自分の持つ欲求やエネルギーを自由に使えるようになることは、よりよく生きるための必要条件ともいえます。このように自己の内部に閉じ込められてしまったエネルギーを解放するためには、自らの持つシールドに気付くこと、シールドの取り外し方を身につけること、そしてシールドを取り

外して自分のエネルギーや欲求に実際に触れる体験を持つこと、が必要です。

このワークショップは、筆者が1983年にアメリカ・エサレン研究所で参加した Michell Cassou の PAINTING EXPERIENCE というワークショップでの体験を参考にしながら、ゲシュタルトアプローチによる絵画制作を通して参加者各自が自己理解を深め、自己の内に持つ創造能力に自分の力で触れていくことが出来るようになることを目的として実施しました。

実施の実際 ―

<セッティング>

制作室には清泉寮のカンファレンスセンター研修室C1が割り当てられた。C1研修室は15畳程度の洋室で、室内には流し台が設備されている。壁面には参加者の人数分の丈夫なベニヤ板を固定してイーゼルの代わりとした。採光のために天井にはリフレクターランプを各自に一個設置して、画面を照明した。人数に比して研修室が狭く、15名分の制作スペースを確保すると窓が塞がれてしまって外も見えず洞窟の中にいるような感じになったが、冬の清泉寮の寒く長い廊下を下ってきて、この明るく暖かいアトリエに入るとあたかも母の胎内にいるかのごとき安らぎを感じ、絵の具の香りとあいまって独特の密度の濃い空間が創造できたのは幸いであった。

画用紙は半切を使用した。絵筆には日本画の絵筆を用いた。日本画の絵筆はそれ一本で太い線から細い線まで自在に表現できる良さがあるからである。絵の具は通常の不透明水彩（24色）を用いた。部屋の中央にはテーブルを準備し、その上に絵の具、絵の具皿、筆、筆洗い、タオル、などをおいて共同で利用した。共同利用としたのは、個人作業で内向的になりがちな状況なので、他者の存在を意識し、現実との触れ合いを持ちながら制作できるようにするためである。床には汚れ防止のために作業用のビニールシートを敷いた。

<進め方の概要>

各自の画板に画用紙を固定する。画用紙と向き合って、自分の感じるままに色を選び、自分の描きたいイメージを自由に描いていく。描く上での厳密なルールはないが、次の四つを条件とした。

1. “表現”であるので、たとえその様な気持ちになったからといって絵の具を投げつけたり、絵筆に含ませて絵の具を飛び散らせたり、上から絵の具を流すなどして偶然に任せるのではなく、一筆一筆最後まで自分の手で描き込むこと。
2. 写生をするのではないということ。
3. 自分で完成したと思ったら（または、続けられなくなったら）ファシリテーターを呼んで、制作した絵について対話を持つこと。

4. セッション期間中は、一枚の絵が終了しても休憩はとらずに、すぐ次の制作に取り掛かること。

ファシリテーターとの対話はこのワークショップの中の重要な要素である。ファシリテーターは、作品の内容や技法についての指示や作品の解釈などは一切行わず、参加者自身が自分の内的プロセスと同時に表現された画面とに対する気づきを深められるように、ゲシュタルトアプローチによる対話を行う。以下にファシリテーターの視点として気づいたことを未整理ではあるが列挙した。

- ・表現されたもの（結果）ではなくて、描くプロセスを大切にすること。
- ・休まずに次々に描いていく（先に考えたり構想を練ったりせず、心に浮かぶまま、感じるままに色や絵筆を使う。今ここに生きる）
- ・毎回まっさらな白紙から始める一枚一枚の絵が一つの人生（絵にも一生がある。何生も生きてみる。生き方に気づく）
- ・図だけを大切にすることだけでなく、すみずみまでよく見て、不十分さが残らないように描き切る（不完全なゲシュタルトを完成させる）
- ・嫌いな絵になってしまっても途中で捨てないで、嫌いなところに手を入れて、充分納得して終わるところまで描き続ける（不完全なゲシュタルトを完成させる）
- ・できあがった絵の様々な部分と、対話してみる（絵に聴く、絵の中にプロジェクトされた自己との出会い・統合を試みる）
- ・自己の内外からの評価や批判、予想（空想）した結末に捕われることなく、あるがままの自分にゆだねる（今このプロセスに生きる）
- ・創造過程を楽しむ

<スケジュール>

活動時間の大部分は個人の制作時間（ペインティング）とした。ワークショップの全日程はつぎの通りである。

クリエイティブペインティングの日程表

| | 第1日 | 第2日 | 第3日 | 第4日 | 第5日 | 第6日 |
|-------|-----|-----|------|-----|-------|-----|
| 9:00 | | P 2 | P 5 | P 7 | P 10 | 閉会 |
| 12:00 | | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 |
| 13:00 | | 休憩 | 準備 | 休憩 | ふりかえり | |
| 15:00 | 開会 | P 3 | 交流会 | P 8 | 発表会 | |
| 18:00 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | |
| 19:00 | P 1 | P 4 | P 6 | P 9 | 発表会 | |
| 21:00 | | | スライド | | 片付け | |

（Pはペインティングセッションの略）

第一日

学内総合実習期間には特別な事前学習を行うことはせず、制作用品の準備だけを行った。

清泉寮到着後の開会式前の時間を利用してアトリエのセッティングを行った。夕食後は、最初にねらいを確認し、全体の日程の見通しを立て、道具の使いかたや制作の進め方を説明し、一回目の制作に入った。学生の場合比較的躊躇なく制作にとりかかるが、筆が動かず画用紙の前で考え込む者には、まず自分の気に入った色を選んで、感じたままに最初の絵筆を入れるように励ました。初日の夜なので疲れも少ないのか、夜10時近くまで制作する者もいた。

第二日

朝から前夜の制作を続ける。早い人は一枚目が終了する。ほとんどが立ち作業なので一セッションの時間は3時間とした。昼食後は休憩を2時間ほど入れて、午後の制作にはいる。さらに夕食後に夜の制作をおこなった。一枚の絵の制作時間は個人によって異なり、終了した絵には裏面に日付と時刻を記入しておいた。

第三日

午前は制作。午後の前半はメンバー同士の自己紹介と全体の交流会の準備に当てた。午後の前半は交流会として、クリエイティブ・ペインティングのメンバーが担当して合宿参加者全員のレクリエーションを行った。夜の制作の終了後は希望者に、ハンターホールのライブラリーで暖炉の火を楽しみながら、担当者がアメリカ・エサレン研究所で制作したペインティングのスライドなどを紹介した。レクリエーションやスライドなどは、制作に疲れ始めたメンバーにとって適度な息抜きになったようである。

第四日

二日目とほぼ同様の日程で終日制作を行った。

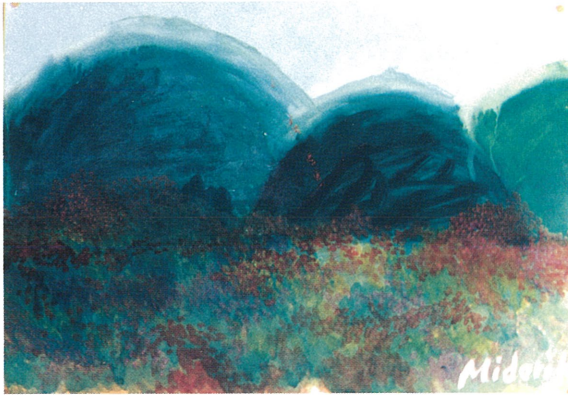
第五日

制作の最終日として、午後の前半までを制作時間にあてた。制作終了後、各自の全作品を並べてそれらを見ながら個人で制作過程をふりかえってメモをした。その後夕方からの発表会の準備を始めた。発表は各自の作品を制作順に総て展示した。作品にはそれぞれタイトルと制作者のコメントを付けた。発表会終了後、愛着の生まれたアトリエを片付けて元の研修室にもどし、ワークショップの終了とした。

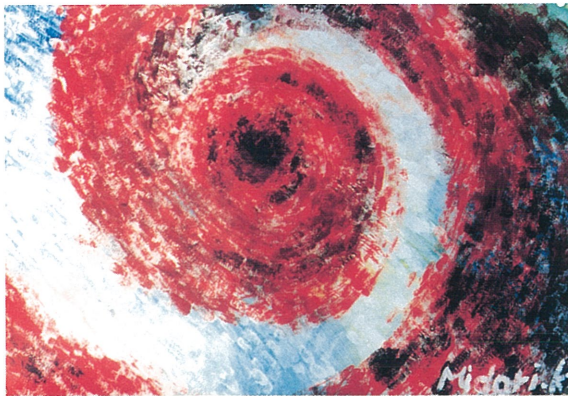
Kさんの作品



作品 1



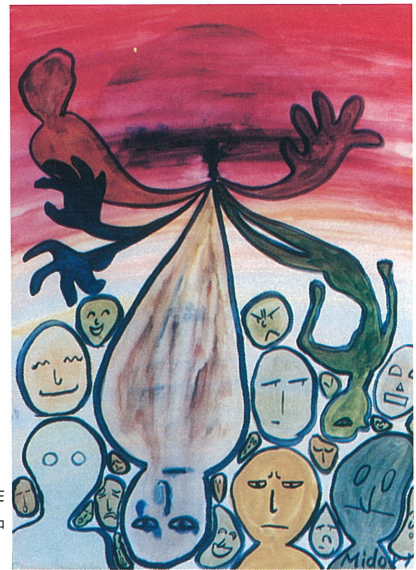
作品 2



作品 3



作品 4



作品 5



作品 6



作品 7

〈制作の実例〉

制作の実例として、参加学生のKさんの7枚の作品の制作過程を、彼女が「ふりかえり」の時間に書いたコメントを引用しながら以下に示した。(作品は前頁に掲載、「」内はKさんのコメント,〔〕内はファシリテーターのはたらきかけの概略と感想)

作品1 (第1日)

「何をかいたらいいのか、まだ自分の中ではっきりしていない状態のまま、いろんな色を重ねてみた。真白い大きな画用紙を前に、好きな絵をかける!というのですこうれしかった。できるだけ淡くシンプルなデザイン画のようにしたかった」

〔画面のすみからすみまでをよく見て味わい、不満足なところがないか感じ取りながら、完結するようにすすめた〕

作品2 (第1日～第2日)

「山や草花といった自然の風景をあらわしたくなった。緑をたくさん使って青々とした風景にしようと思ってかいたが単純な形や色づかいで簡単になりすぎて“雑”というイメージがあってあまり好きでない絵。……でもそう云ってしまうと絵がかawaiiそうみたい……。 “絵”は、もう自分からはなれて、ひとりですきだしたように感じた」

〔早く切り上げようとしたので、どうなったらもっと好きになれるかを問いかける。嫌いな絵でも途中で放棄せず(未完に終らせず)、納得いくところまで充分手を加えて、完結させるようにすすめた〕

作品3 (第2日～第3日)

「はじめは、いろんな色を使って円をえがいたもの。そのうち物足りなくなると、その上に白を置き、重ねて赤いエネルギーをかきました。赤色をぬるのはひどくためらわれたけれど、思い切ってかいてすっきりしたので良かったと思う。絵に生命のエネルギーを宿すことが少しでもできたと思う。少し迫力不足かなあ……」

〔途中で手が止まってしまったので、何が心の中で起こっているのかを問いかける。“空想上の悲惨な結末”に捕われずに“今の欲求”を大切にしながら、完結するまで描き込んでゆくことをすすめた〕

作品4 (第3日)

「大人の女の人の横顔をかきたかったけれど、つけたしのつもりで大きくかいた鳥が気に入らなく、それを塗りつぶして今度は小さな鳥をかき始めたら鳥の方が気になりだし、おもいっきり、あきるまで鳥をかいた。いろんな色を使って……。女の人も鳥も表情がなく全体がぼーっとしてる感じ。なんだか狂気じみてるなーという気がする」

〔途中で手が止まってしまったので作品3と同様に欲求を明確化した〕

作品5（第3日～第4日）

「本当は、鮮やかな夕日と美しいシルエットで終る絵でしたが、それだけではつまらなくなり、影をたくさんにしているような表情をつけた。そして人間のいろんな表情をつけてみた。はっきり云って好きじゃない絵だけどそれなりに愛着のある絵。はずかしさを捨てようとしたけれど少々まだ残っている感じが私らしいと思う……。No.4といい、No.5といい、普通じゃないみたいな絵だという気がする」

〔自分自身の内部にあるものとよく対話しながら制作できるようになってきている〕

作品6（第4日）

「これはNo.5につられて手をかきはじめてたけれど途中でいやになったもの。もっと違うものがかきたいような気がして、またまた塗りつぶしてしまった！もっとかきたいものがあるはずだ！とか思って、空や星や宇宙なんかをのびのびかこうと思った。生まれたばかりの星、生命の最後を迎えた星、まさに生まれようとしている星、など小さいものから画面にのびのび大映しになった星など、いろいろあるけれど、私がいちばん好きなのは、左下のオレンジに燃える星。この星は、いちばん生命体としてのエネルギーを“今”，この瞬間に発散しているいきいきした星。まっすぐに自分の思った道を進む星だから……」

〔非常に集中度が高く、熱中して制作していた。完成後、画面の中のいろいろな要素との対話を試みる。彼女自身の深いところからの言葉（実存的なメッセージ）がほとぼり出てきている〕

作品7（第5日）

「今度は静かな星空をかきたかったのだけど、都会の空にあまり活気がなかったので宇宙からエネルギーを与えようと思い、隕石をかきました。都会の小ささに比べ宇宙は広大で奥深い！という感じがします。星を必死でかきました」

〔画面との対話を行った。彼女がこれから帰っていく世界と彼女の持っている“星”性とのかわりを感じさせる。自然なグラウンディングが準備されているようであった〕

<参加学生の感想>

○自分にはもともと、他人が見てきれいでなくてはいけないという固定観念があったようだが、このワークショップの中では“きたなくてもいいから描きたいものを描こう”と言い聞かせていた。最終的にどういう作品になるかということはほとんど考えなくてもちゃんと出来上がってしまうのが驚きだった。途中で投げ出さずに作品を仕上げることを通して、結果を恐れずまずやってみるという積極的な姿勢の大事さを学んだ。これから、何か一つでも自分の熱中できることや自分で自信のあることを見つけ、その時その時の努力を大事にしたい。

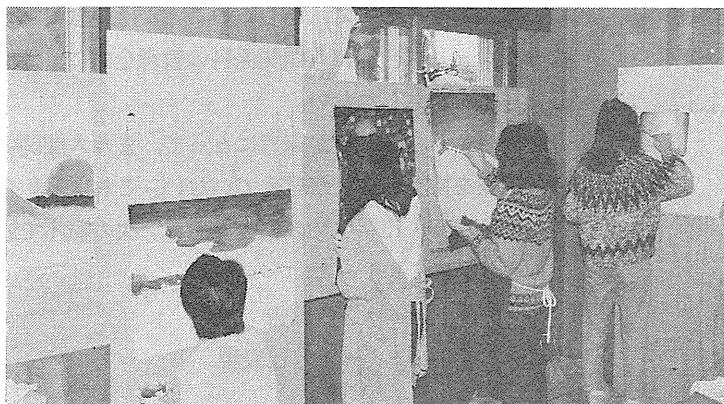
○絵を描くのは中学以来だし、特に私は美術は大嫌いでした。だから一週間絵だけをかいてきたということは自分でも驚きだった。自分は上手だとは思わないけど、かきたいものを素直に描くという度胸がついたような気がする。何でも思ったことを素直に表現できるようになればいいと思います。

○全作品を眺めてよく描いたなあと思います。描いてすごく気に入った作品は最後まで力を入れて描いているが、疲れたり気に入らなかつたりして嫌になると投げ出したくなる。気にとめないようにしていても、まわりからの評価は心のスミに残ってしまう。自分にとって良かったのは、描きたくないという気持ちがあったけどそれを押して描き続けたことと、絵の中にも言葉がたくさんあり自分の感情が十分に含められる可能性を発見したこと。これからも物事をやり遂げる力を生活の中で生かしていきたいし、いろんなものに感情が含まれていることに気づいて行きたい。

○風邪をひいて時々休んでしまった。“どうなってもいいんだ”と思うようになってきたが、最後には結局“きれいに描かなくては”というところに落ち着いてしまって、自分の気持ちを出し切れなかった。自分を自分でわかっていても何だかんだ言って隠してしまう。自分は想像以上に“一人”ということに対して嫌悪感を持っているということに気づいた。これから少しずつでも出せる部分を出して行こうと思う。そして一人であることが嫌いなら、自ら進んで自分をさらけ出すことによって他人と接触していこうと思う。

ま と め —

絵画制作を通して自己理解を深め、自己の持つ創造能力に触れるというねらいはかなりの程度達成されたと考えられる。ペインティング・ゲシュタルト・アプローチとでも呼べるようなこの方法は、参加者にとって、活動内容に自律性が高く、作品が残るという意味でも魅力的であるようである。今後の課題としては、グループ内のダイナミックスの活用を探ることや、ペインティング以外の活動をも導入して変化のあるワークショップにすることも検討したい。



ワークショップ4

オイリュトミー

グラバア 俊子（南山短期大学助教授）

自己表現の観点から「オイリュトミー」ワークショップの報告をする訳であるが、その前に、教員にとってのワークショップ合宿の楽しみについて述べておきたい。

ワークショップ合宿は筆者にとって二つの側面を持つ。一つは、自己の内に潜む様々な衝動に目覚めの光を与え、それらが教育すなわち成長の糧となりうるものかどうかを探る時間と空間を与えてくれること。二つめは、自分自身の個人的な関心や強い衝動に教育的なかたちを与える場を提供してくれるということである。まだ個人的関心にとどまるものを、同じ学ぶ者として学生達と集中的にわかち合うチャンスを与えられることは教員としては大変有難いことである。実際にそうした機会を通して、学生の反応に励まされ手探りながらもボディ・ワークという各論を開講するに至ったこともある。また、同僚や学生達のめめられたタレントと創造の熱に思いがけなく遭遇する楽しさも忘れる訳にはいかない。

比較的自由な枠組の中で自己の可能性を試すことができるこの構造自体が、「オイリュトミー」という内容を超えて、筆者にとっての自己表現の場であったと言えよう。そして、もしこのことが他の教員にもあてはまるとしたならば、ワークショップ合宿は人間関係科の教育全体に創造的なインパクトを与えていると言えるかもしれない。

今後オイリュトミーが筆者にとって、また人間関係科の教育にとってどのような意味を持つかはまだ見えていない。これは「オイリュトミー」ワークショップ二年目（12・13期生）の報告である。次の順序で述べていきたいと思う。

1. オイリュトミー
2. ワークショップの報告
3. オイリュトミーと自己表現

1. オイリュトミー・EURYTHMIE

オイリュトミーは今世紀初頭、ルドルフ・シュタイナーによって創始された言語・音楽芸術である。シュタイナーはウィーン工科大学で哲学と自然科学を学び、まず「ドイツ国民文学叢書」に収めるゲーテの自然科学論文の編集者として世に知られ、後に神智学協会のドイツ支部の指導者として活躍した。1913年神智学協会から分離独立する以前より、社会改革のための思想をも含む独自の人智学 Anthroposophie を構築し、現在もその思想に基づき人智学運動が展開されている。シュタイナーの活動を見ると、有機農法・医学・治療教育・学校教育・建築・芸術等々、人間が生きるということのすべての側面にかかわっているかのように思える。オイリュトミーもそうした人智学運動の中から育ってきたものである。オイリュトミーそしてその根底にある人智学の全貌を語ることは、筆者の力の及ぶところではない。ここではシュタイナーの人間観と筆者がオイリュトミーに魅かれる主な理由の一つである言葉に関して簡単に触れてみたい。

○シュタイナーの人間観—人性三分説

シュタイナーは、人間はその本質において^①霊 (Geist)、^②魂 (Seele)、^③体 (Leib) の三つの側面を持つと言ひ、その代表的な著書『神智学』では花の咲いている牧場を例にとりて説明している。「私とその牧場を通るとその花の香り、色、咲く姿、感触等が感覚を通して伝わってくる。私はその花を喜び楽しむ。私は感情を通して花とかかわりを持つことになる。そして次の年また同じ牧場を通ると、そこに咲いているのは同種でも今年咲いた新しい花である。そしてその花は昨年の花と同じ法則に従って咲いているのである。その法則は私に開示されたものであるが、私の喜びと異なり、私の存在に依存していない。私の喜びの感情は私の中にあり、花の法則と本質は私の外に、世界の中にある。」⁽¹⁾ここで外界の事物を受けとるものが体であり、事物からの印象を形成し事物と自分自身を結びつけるのが魂であり、事物の本質や法則を認識するものが霊ということである。シュタイナーはこの人性三分説を同書の中で次のようにも表現している。

人が満天の星空を仰ぐとき、彼の魂を圧倒する恍惚感はそのものである。しかし彼が思考^①によって把握する星辰の永遠の法則は彼のものではなく、星辰自身のものである。それ故人間は^②三つの^③世界の^④住人である。彼は^⑤身体を通して、^⑥感覚によっても捉えられる世界に属している。魂を通して彼は自分自身の世界を築く。そして^⑦霊を通して、他の二つの世界を超越した世界が彼に開示される。⁽²⁾

この人間観はシュタイナーの思想を理解するうえでの出発点であると思われる。当然のことながらオイリュトミーにおいても、それは三つの基本要素としてあらわれてくる。

オイリュトミーの基本要素は、魂の生活を多様化し充実させ、その結果魂の営みが対人関係や対社会関係の中で、運動形式をもって表現できるようになるのである。しかしそれは、また肉体を空間と時の特質で充たすための修業を肉体に課すものでなければならない。最後に表象や概念や理念が、生命をもった動く形態となって、空間の中で目に見えるようになる程にまで、現実的な力を持てるように、人間の内なる靈的なものが、活性化されねばならない。⁽³⁾

○オイリュトミーにおける言葉をめぐって

オイリュトミーは“目に見える言葉、目に見える音楽”と言われる。筆者の言語への関心は、対人コミュニケーションにおける言葉の限界性から発している。互いに語る言葉が抽象論で空まわりをし、何も産み出さず、言葉を重ねることによって相手との距離が遠のくことを特に二十代前半に経験したのである。そして、言葉以外に人と人とを結んでいく方法を模索する方向に進んでいったのである。ある意味では、言葉に対して望みを失っていたといえるであろう。そういった言語に対する認識を踏まえた上で、新しい可能性を提示してくれたのがシュタイナーである。言語に関してシュタイナーが「オイリュトミー芸術」で述べていることを幾つか引用してみたい。

今日の言語は、とうとう学問的認識のための表現手段になってしまいました。生活の中で伝達したいと思う事柄のための表現手段になってしまい、本来言語にそなっていた魂的な力が失われてしまったのです。詩人シラーが、「魂が語っているのに、ああ、語っているのはすでに魂ではない」と見事に述べたことは、実際文明化した言語によく当てはまるのです。⁽⁴⁾

現代の文明生活の中では、人間の本性が言語の中に存在していないままに、人は会話を交しているのです。言語は、人間の本性そのものから生まれました。母音を例にとってみましょう。母音は常に、魂の感情体験を表現します。人間は、驚きの中の魂の体験を a で、抵抗に出会ったときの態度を e で表現します。自己主張や進んで世に出ていこうとする態度を i で、あるものへの驚嘆や順応を e i で表現します。このことは当然、別の言語のためには、別の仕方と考えられねばなりません。なぜなら、別の言語は別様の感情生活に由来しているからです。しかしいずれにせよ、すべて母音というものは魂本来のいとなみである感情を表現しています。そしてこの感情が、頭脳から言語へ移って行く思考内容と結びつきます。⁽⁵⁾

先に触れた、人性三分説からすれば、魂は自分自身と事物を結びつけるものであり、それが存在しない言葉は、その人自身がそこになく、抽象的な言葉にならざるを得ないのである。

オイリュトミーは、音声や歌唱の中に含まれている、人間の本性に由来するものそのものを腕や手そして人間全体の動きによって表わすので、その意味で目に見える言葉、目に見える歌唱である。オイリュトミーを行う側から言え

ば、それを学ぶことによって、言葉が本来もっている性質、作用を再認識し、その力を実際に感じとり、自己の言語にその力をとり戻す可能性を与えてくれるのである。

一時は、言語への不信から、非言語コミュニケーションに関心が集中したのだが、オイリュトミーという視点を得て、新たに言語と非言語を統合したものとしての言葉、語った内容を産み出すことのできる創造的な言葉を如何に語れるかが、新たな課題となったのである。このような言葉を語るということは、自己と言葉のありようが変わるだけでなく、周りを取りまく自然界、そして人々とのかかわりが変わる訳である。そういった意味で、オイリュトミーとは、「人間関係の再創造」を目指す芸術と言えるかもしれない。

2. ワークショップの報告

ここでは、ワークショップで行った12セッションの概略を日程表（次ページ）で示し、その内容について部分的ではあるが説明を加えることとした。

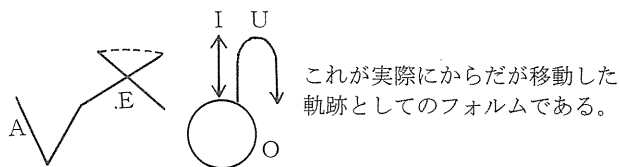
①, ビデオ

オイリュトミーの実際の場面と、シュタイナーの教育思想の語られているものを選びオリエンテーションとした。

②, 母音

A E I O U
V X | O ||

手、足、からだ全体を用いてそれぞれの母音の持つ響きをこのようなかたちで表わす。動作は手ばた信号のように固定的なものではなく、響きそのものになるので、かたちは正確に取るが、余韻が消えるまではその動きの中に流れているもの、響いているものがある。次第にからだ全体の描く動線、フォームで母音をとりながら手でも母音をとるという風に進んでいく。



③, 歩く練習

まず立つ姿勢であるが、ひざを自然にゆるめてから背骨を意識しながらスーッと立ち、そして自我の力の音であるIを背骨に響かせるのである。Iの形は拮抗する二つの力をしっかり自分の中にひきうける形である。オイリュトミーをはじめる時に唱えるマントラの一つは「光は上方へ流れる。重力は下方へか

第1日 第2日 第3日 第4日 第5日 第6日

| | | | | | |
|-------|--|---|---|---|--|
| 9:00 | <p>W.S.-2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オイリュトミー小講義 ・言語形成 ・歩く練習 -三拍子 -フォルム | <p>W.S.-5</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言語形成 ・音楽のオイリュトミー -“乙女の祈り” -“ラルゴ” -シューベルト “楽興の時” -“プレリュードハ長調” -ベートーベン “ソナタ悲愴” | <p>W.S.-7</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言語形成 ・フォルム -三角形 -五芒星形 -8の字形 -シュタイナー「祈り」 のフォルム | <p>W.S.-10</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表会のための話し合いと練習 | <p>W.S.-12</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習会 「言葉のオイリュトミーと音楽のオイリュトミー」を資料として |
| 12:00 | | | | | |
| 13:00 | <p>W.S.-3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽のオイリュトミー -“乙女の祈り” -ヘンデル“ラルゴ” -バッハ“プレリュードハ長調” ・言葉のオイリュトミー -母音・フォルムを描きながら -シュタイナー「祈り」 | <p>自由時間 交流会</p> | <p>W.S.-8</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽のオイリュトミー -日本語のリズム 短・短・長 -“楽興の時” -グノー“アペマリア” -バッハ“メヌエット” -“ソナタ悲愴”その他 ・言葉のオイリュトミー 「祈り」 | <p>W.S.-11</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言語形成 ・総復習 ・発表会の練習 | |
| 18:00 | | | | | |
| 19:00 | <p>W.S.-1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ ・マントラ ・母音 | <p>W.S.-6</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習会 「オイリュトミーの四つの基本的要素について」を資料として⁶⁾ ・星をみる会 ・「タベの祈り」 | <p>W.S.-9</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉のオイリュトミー -「タベの祈り」 フォルムと朗唱 | <p>発表・展示会</p> | |
| 19:30 | | | | | |
| 21:00 | | | | | |
| 21:30 | | | | | |

かる」というフレーズで始まるが、重力に対してしっかり二本の足で立ち背骨をまっすぐに上へむかって伸ばすことは、人間にとって非常に本質的で重要なことと考えるのである。上へ流れる光の力を背骨に感じるように、光の背骨と表現することもある。

歩く練習は、まず三拍子で行った。

両足をそろえる

1. かかとを上げる一意志
2. 足を前へはこぶ一方向づけ
3. 着地 一行為

歩くということは、人間にとって無意識的、自動的な行動になっている。しかしそれをもう一度意識化してみると、上にあげたような三つの異った動きで組み立てられていることがわかる。この三つの異った質を意識しながら歩くことにより、歩くことの本質を体験することになる。このようにオイリュトミーでは、日頃意識することの少ないからだの動きすべてを意識的に行おうとする。その時動きの中心は腰でなく胸であるのもオイリュトミーの本質からくる特徴である。

また動きの方向を考えると、前へ進むのは未来へ向う体験であり、後ろに戻るの過去への追憶、または自分の根源へさかのぼるといふ体験である。そのような意識をもって前後に歩くのだが、それにヘンデルの“ラルゴ”を用いることもあった。

このように、歩く練習といっても何かを上手にするために練習するというのではなく、今踏み出すその一步一步を体験していくことに意味がある。そういった意味で、オイリュトミーには上手、下手ということはない。シュタイナーは問われてオイリュトミーは3才から90才まで可能だと答えているが、その人なりの、その年齢なりのオイリュトミーがあるのだと言えよう。

④、言語形成

発声練習に近いものであり、主に母音を体内に響かせるのではなく外へ響かせる練習を行った。発声の時の口の形と発声される位置が母音によって喉の後方、前方とそれぞれ変化することに注意を向けた。

⑤、音楽のオイリュトミー

音楽を全身の動きが描くフォルムで表わすのだが、短いものは曲のある部分10小節ぐらいを用いた。手の動きも加えるようになったが、同じフォルムを繰返して行った。幾つかフォルムの例を挙げてみる。

A U E
互いに深く目覚めながら

A O A
汝の梢を天蓋のように

U A
美しく飾れ

O E A I
燃え上がる敬虔な魂より来たる

A I
我らのしめやかな

A U
捧げ物の上に

ルドルフ・シュタイナー「祈り」

A I
太陽の光

I A
そは昼を明るくす

O U
夜にむけて

A I
魂の力

E
そは目覚めん

E I
眠りの静けさより

A A
汝我が魂よ

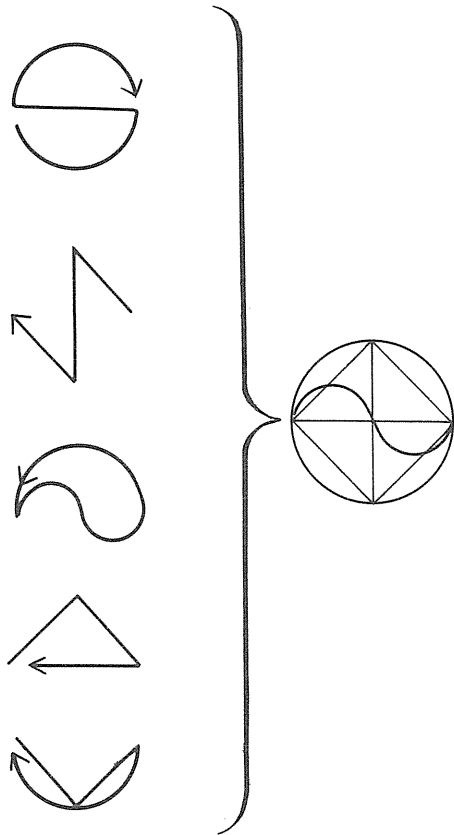
I A
光に感謝す

U A
そはかのうちに輝く

A I
神の御力

A A
汝我が魂よ

O U U A
行ひにむけてすぐれてあれ



以上がワークショップの概略であるが、13期生の一人は次のようにのべている。

さて、私はオイリュトミーについてかなりの偏見をもって合宿に行ったが、そこで

の1週間ですっかり考えが変わった。まず、オイリュトミーはどのようなものか、ということ資料やプリントやビデオで知識として頭にいれ、それから後は、1週間ずっと自分でオイリュトミーを行った。呼吸から五つの母音の表現、リズムにあわせて体を動かすこと、音楽の流れに沿って動くこと、詩の中の響きを表現すること、1週間ずっとオイリュトミーと付き合っって面白いと感じるようになった。が、今から思うと、1週間オイリュトミーをしても、オイリュトミーの本当の意味やねらい—靈的衝動の自己表現—ということには程遠かったと思う。今も理論としては結構わかっているつもりだが、実際にはオイリュトミーによって自分がその境地に立てると思うところまでいっていない。しかし、オイリュトミーを体験したことの収穫としては、それによって、ルドルフ・シュタイナーという人と、その人間観を知るきっかけができたということである。私は今、オイリュトミーそのものよりも、シュタイナー教育の方に強い関心がある。その教育観の中で出てくるオイリュトミーということについて実体験を持っていることも、シュタイナーを理解していく上での要素となるだろう、と思う。

学生の反応を見ていると、皆初めての経験で様々な思いを持ってやってくるが、いったん始めると抵抗なくすーっと入ってしまい、集中度が高まり、時間が早くたつようである。進度についても、継続してオイリュトミー講座に参加している人達に比べてずっと速く、感覚が鋭いように思われる。例えば、人間を表象する形でもある五芒星形のフォルムを動く場合、スタート地点での方向を90度ずつ回転させて同じフォルム描くというなかなか難しいものがある。これは、視野、ものごとの把握の多様性、柔軟性にもつながる練習であるが、学生のみ込みは実に早い。シュタイナーの人間精神の進化論からすれば、若い学生の方がより進んだ精神の可能性を有している訳であるが、まさにその通りだと実感せざるを得ない。

上記の学生は、オイリュトミーの体験からシュタイナー教育に関心を持ったと述べているが、人間関係科の授業のひとつである「各論・教育」の中でも、シュタイナー教育に関心をひかれる学生は多い。そして、彼女達がひかれる理由として挙げている中に、人間関係科の教育と非常に似ている、人間関係科の体験学習の意味が、シュタイナー教育に関する本を読んでよくわかった、といったものがある。個人的関心から始めたオイリュトミーであったが、このような声を聞いてはっとさせられた。人間関係科の教育をより豊かにしていくうえでも、人間関係科の教育と関連づけながらシュタイナー教育を学んでいくことは、これからの課題である。

3. オイリュトミーと自己表現

オイリュトミーと自己表現ということに関しては、様々な側面があり、初心者の筆者としては少々手に余る観があるが、可能な範囲で述べてみたい。

オイリュトミーを学ぶ際、「オイリュトミーを自己表現としてやりたい人がいても、それはかまいません。しかし、オイリュトミー自体は自己表現ではありません。」と言われる。ここで言われている自己表現とは、その人らしさを表現する、つまり個性の発露とでも言うべきものを指すように思われる。しかし、オイリュトミーにおいては、「重要なのは、主観的体験ではなく、対象そのものに含まれている真の内容を表現することである。』⁽⁷⁾実際にオイリュトミーを行う時には、常に目をしっかりと開き自分の動きを意識するように励まされる。うっとり目を閉じて自己の内的な世界に陶醉するという在り方は避けるのである。それでは冷たく客観的な営みかといえばそうではなく、そこには必ず魂の熱がある。オイリュトミーを行う中で心の深く揺り動かされる経験があるが、その感情に焦点をあてるのではなく、それを引き起したある動きがもつ本質そしてその性格と感情に焦点をあてるといえよう。そこに見い出されるものは、私らしさという自己表現を奥へ奥へとつきつめていくと解き明かされる、自己表現そのものを支えている音楽や朗唱の本質的な形姿や法則といえよう。

しかし、自己表現という考え方を広げてみると、オイリュトミーと自己表現ということの異った側面があらわれてくるように思う。

ワークショップも終りに近づくと、学生達は非常に疲れてくる。筋肉痛のような運動をやった後の疲れでもないし、頭をつかったり気をつかって疲れたというものとも違う。気分はさわやかで疲れたとは思わないのに、座るとエネルギーを使い果たしたような感じで立てなくなるといった状態である。汗はたくさんかくが心臓がドキドキしたり呼吸が苦しく乱れることもほとんどないので、学生も不思議に思う訳である。

一週間を終えてある学生が「こんなに疲れるのは、心も一緒に動かしているからだ」と表現した。初めは、手の動き・フォームなど習ったことを真似て、自分の動き一つ一つを意識しながら動く。それが次第にからだの中に入ってきて、音楽や朗唱と共に自然にそれがあたり前のように動き出す。そして、ラルゴなら明るく、アレグロなら静かに時に切なくと自分の気持も変わり、表情までが変わっていくようで、ふりかえてみるとオイリュトミーをしている間他のことは一切考えていなかったというのである。また他の学生は次のように述べている。「木曜の夜そして金曜は不思議な程消耗してしまった。でも金曜になってから、自分の中から流れ落ちるものがすべてぬけ落ちた時にかくれていたなにかが輝き出す、又は自分の中に空間ができたとき、そこになにか外から新鮮な空気が入ってきて自分の内部が息づきはじめるという感じを持ちました。」

シュタイナーは「オイリュトミーを演ずる人が、その人間としての全存在を、いかにして形成し形成される運動の中へ移し入れることができるかが問題なのです。」⁽⁸⁾と述べ、また「そこでは肉体と魂と霊とが一体となって働いていま

す。」⁽⁹⁾とも言っている。ここで述べられている学生達の体験はその境地に近いものではなかろうか。

心も一緒に動かしている私—自己，ということをごこのような文脈で考えてみると，そこには個別的な自己だけでなく普遍的自己とでも言えるものが見えてくる。個別的な自己は，唯一のかけがえのない存在である私としての自己，私の独自性として担う部分である。普遍的な自己とは人間としての私，宇宙法則の一部である人間の本性として担う部分と言えよう。

芸術としてのオイリュトミーを見ると魂と霊（認識によって得られた宇宙法則）を目に見えるものとして観客に差し出すという営みであろう。しかしオイリュトミーを学ぶものにとってそれは，オイリュトミーを通して表われる人間の本質，宇宙の法則を体験することであろう。オイリュトミーを行うことにより，宇宙法則の一部である人間であることを生きてみると言えようか。このように言うことが可能ならば，学生が感想の中で述べていたように“オイリュトミーとは霊的衝動の自己表現である”ということが成り立つであろう。

以上報告してきたが，オイリュトミー，人智学を学ぶことは自己の生き方に深くかかわる課題であり，まだ予感の域を出ていない。また新しい芸術を言語で伝えることの難しさもあり，オイリュトミーというものを初めて知った方には解りにくい点が多かったのではないかと思う。お許し願いたい。

注

- (1) ルドルフ・シュタイナー『神智学』—超感覚的世界の認識と人間本質への導き—高橋巖訳，東京，イザラ書房，S.52年，p. 31～p. 32を抄出しながら大意を述べた。
- (2) 『神智学』からの引用であるが，ここではF.W.ツァイルマンズ，ファン・エミショーベン『ルドルフ シュタイナー』伊藤・中村訳，東京，人智学出版社，1980年，p. 97～p. 98を用いた。
- (3) ルドルフ・シュタイナー『オイリュトミー芸術』高橋巖訳，東京，イザラ書房，S.56年，掲載のエリゼ・クリンク「オイリュトミーの基本要素について」p. 79より引用した。
- (4) 同書 「オイリュトミーの本質と起源」 p. 32
- (5) 同書 p. 32～p. 33
- (6) 学習会では資料として笠井毅『人智学とオイリュトミー』東京，ダンスワーク舎，1984年を用いた。
- (7) F.W.ツァイルマンズ，ファン・エミショーベン 前掲書 p. 251
- (8) ルドルフ・シュタイナー『オイリュトミー芸術』 p. 43
- (9) 同書 p. 47

ワークショップ5

情熱とスペイン舞踏

— 感情と表現 —

まどか 庸代（南山短期大学講師）

* * * 序 * * *

スペイン人の心と形・日本人の心と形

今回のワークショップをお引受けした時、私はスペイン帰国後半年程で、スペインからの荷ほどきも充分になされておらず、“未だ、気持ちはスペイン”という時期であった。

スペイン人と日本人。

陽気で表情豊かなスペイン人と無表情な日本人。一見、反対の、或いは、全く違う文化圏の国民性として対比されがちなスペイン人と日本人。ところが、感受性に非常な類似性がみられ、スペイン人と日本人は‘気が合いやすい’と評され、私自身もこれを持論としている。

表情・表現が豊かなスペイン人は、日本人の感じている思いや感情を巧みに表現し尽くしており、それは日本人にとって、自己を表現し尽くしてくれる存在として満足を覚える貴重な相手といえよう。「自己を表現」できるということは、自己実現に通じ、人に満足をもたらすものである。一方、スペイン人は、表現する以前の問題である「自己の感情」そのものを理解・感知してくれる日本人に一種の満足感と信頼感を覚える。類似のものに対して類似の感情を抱き、それを共感し合えるということは、人に満足を与えるものである。

従って、スペイン人は自分自身の内面性を感じ合える日本人に対して、又、日本人は自分自身の感情・気持ちを、内に秘めることなく外にありのままに表現してくれるスペイン人に対して、喜ぶ。

同じものを感じ合っているながら、なぜ故に表現の貧富の差が出てくるのか……?? 十年間スペインの人々との交流を通して懐に温められた疑いをワーク

ショップとして表わした。

今回担当したワークショップを「情熱(自己・感情)とスペイン舞踏(表現)」と、題してみた。喜怒哀楽とフラメンコ(スペイン)による表現、喜怒哀楽と能(日本)による表現、各々のユニークさと共通性を探るべく資料収集した。

同質の感情と異質の表現法——このコントラストは何からくるのか。少なくとも、異質な表現の中にも同質の感情体験の存在することを呈示しておくことが、スペイン帰りの自分として開き得る人間関係科でのワークショップとみなし、新しい企画を試みた。

今回は、「喜怒哀楽とフラメンコによる表現及び自己表現」についてのみ日程を組んだ。以下、行ったプログラムをここに紹介する。

表1 自己表現ワークショップ「情熱とスペイン舞踏」プログラム

| 1985年12月 清里・清泉寮 | 第1日目 9日(月) | 第2日目 10日(火) | 第3日目 11日(水) | 第4日目 12日(木) | 第5日目V 13日(金) | 最終日 14日(土) |
|--------------------|-------------------------------|------------------------------------|-------------------|---------------------|---------------------|---------------|
| 8 | つどい 朝食 | | | | | |
| 9 | | | 自由 | | | |
| 10 | 2-(1) Soleares (VTR #2) | 3-(1) Soleares 仕上げ Paso準備 | 4-(1) Soleares | 5-(1) (VTR #5,6) | 閉会式 全体の ふりかえり | |
| 11 | 昼食 | | | | | |
| 12 | VTR 撮映開始 | | | | | |
| 13 | 個人 レッスン | | 自由 (レッスン) | | 自由 (レッスン) | |
| 14 | 2-(2) Soleares | 3-(2) 交歓会 | 4-(2) | | 発表準備 | |
| 15 | 開会式 | | | Paso de color | 発表会 I | |
| 16 | 1-(1) | 清里 icecream・break 自己紹介 | 自由 | VTR撮映 | 夕食 | |
| 17 | 夕食 | | | | | |
| 18 | 休憩 | | | | | |
| 19 | 1-(2) (VTR #1) | (VTR #2) | (VTR #3,4) | VTR撮映 | 発表会 II | |
| 20 | 2-(3) | | 3-(3) | 4-(3) 発表打合せ | 発表会 II VTR撮映 | |
| 21 | 一日のふりかえり | | | | | |
| 22 | 夜空の散歩 | | | | | |

* * * 試みと考察 * * *

プログラム内容を下記の大要に沿って概観しておく。それぞれの試みの項では今回プログラム作成に織り込んで試みたことや配慮したこと、及びワーク実施により「感情と表現」「自己把握」「自己表現」に関して明らかになったこと等を簡単に論じ、創作プログラム試行第一回めの考察に代える。

プログラムの大要

| | | プログラム表の時間帯 |
|-----|---|------------|
| I | Introduction | |
| | 1. ねらいの共有化 | 1—(1) |
| | 2. スタジオ作り | 1—(2) |
| II | 感情と表現 | |
| | 1. 言語（表現手段）としての色、現象（表現されている感情）としての足踏み……色彩 Color, 足踏み Paso による喜怒哀楽 | 1—(2) |
| | 2. フラメンコから Paso de Color への導入 | 3—(1) |
| | 3. WORK : Paso de Color 2つの作品作り | 4—(2) |
| III | VTR をみる及びフラメンコの修得 | 2～5 |
| | # 1 カルメン | |
| | # 2 フラメンコ : SOLEARES | |
| | # 3 長嶺ヤス子『まんだら』 | |
| | # 4 スペインの祭 | |
| | # 5 フラメンコの祭 SOLEARES (セビリア市) | |
| | # 6 A. Gades『血の婚礼』 | |
| IV | 発表会 | 5 |
| V | ふりかえりの用紙の作成 | 1～5 |

試み1 プログラム創作とその意図

このワークショップ「自己表現」で私の試みたもの、それは、感性とその表現法における日本人とスペイン人の比較文化であることを強調しておきたい。それを通して、日本人である自分とは何かを見つめる。その表現されている自己に気づくこと（自己把握）とその把握した自己を表現してみること（自己表現）と同時にその時の自分の気持や変化・成長を受け入れていくこと（自己受容）などを参加者と意識して識別しつつ、「自己表現」が自在に成される瞬間・瞬間を五日間の流れの中で各自が体験することを期待した。

そのために、自己把握の視点（自己の何に着目しているか）を随時明確にしておかなければならない。その一つの視点として「日本人としての自分の感性とその表現」の特徴を、フラメンコを紹介しながら呈示した。つまり、①異文化に接して初めて自分の文化の独自性・唯一性に気づき、②更に自他二文化の共通性に気づいていく、という手順を体験し得るワークショッププログラムの作成を試みた。

I Introduction

- | | |
|-----------------------|-------|
| 1. ねらいの共有化 | 1—(1) |
| “スペイン人と日本人の心と表情” | |
| “感情表現法の模倣・修得から自己表現へ” | |
| 2. スタジオ作り (Fig. 1 参照) | 1—(2) |

試み2 スタジオづくり

清里でのワークショップにおいて、限られた時間と空間を使っての五日間、参加者は「舞踊家」になるのである。

舞踊家、即ち、彼らの表現手段は肉声の「言葉」ではなく、肉体の「舞い」である。そのためには、環境が視覚的・感覚的に整理されていることが大切である。自分の内からの感情の出現や変化に敏感になるためにも、「五日間の舞踊家達の環境としてのスタジオ」作り及び自由な空間設定には細心の注意を払った。この配慮を学生（参加者）が意識するかしないかは問題ではない。むしろ気づかれない方が望ましい。参加者に「整頓」を強調すると、短絡的に「きれいにすること」と混同してしまう。スタジオは、きれいにするのではなく、個々人が素直に、感覚的に動きやすいような自然さ、整然さ、静閑さを確保しておけばよいと推測した。

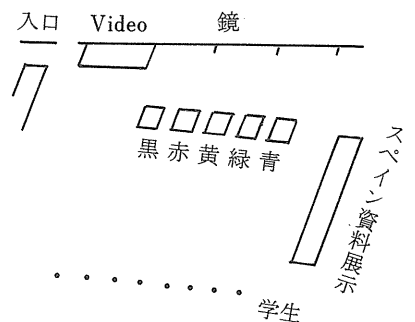
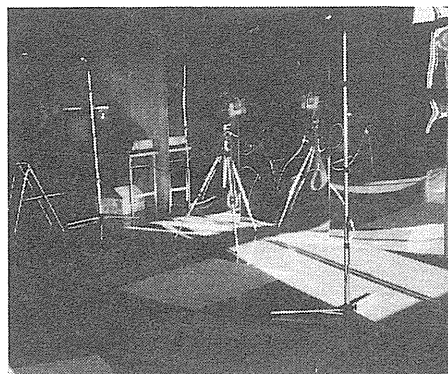


Fig. 1 スタジオの設置図

II 感情と表現

試み3 「表現」手段の視点限定

私のワークショップにおいて、表現手段は舞踏と色彩に極力限った。そのためには、「今日は楽しい(状態)」、「今日は楽しみたい(内界へのチャレンジ)」、「今日は楽しいといいなあ(外界への憧れ)」など、『楽しい』という感情を意味する言葉を使う代わりに色彩か表情(目つき、肢体全体の動き)を使うよう徐々に導いた。言語化するのではなく表情化するのである。

一日に一回は、本人の感情と色(表現)とが呼応するような質問(Q1~4, 一日のふりかえり)をする。その答え(A1~4)は、色模造紙の場所に自分が自分のステップ(Paso)を踏みながら体を動かすことで示す。各自、決して言葉で答えないようにする。

「感情と色」呼応づけのための質問は次の通り。

(Q1) 今一番印象的な色、関わりたい色はどれか。

(Q2) カルメンという女性を見て、カルメンの印象は何色か。

(Q3) カルメンという映画を見て、あなた自身の印象は何色か。

(Q4) 今日の自分の色は何色か。

試み4 「感情」把握の視点限定

「自己表現」という語を使う場合、ワークショップ期間中の自己把握の視点の置き方をグループメンバーのうちで共通に了解しておくことは必須である。自己の把握及び自己の表現のし方の混乱や混同を早い時期に避けなければ、短期間のワークは非効果的である。又、「自己を表現する」ということも、「無意識のうちに表現されている自己をありのままに表現させておく(即ち、自然に素直に振舞う)」ということも妨害されてしまう。つまり、自己把握の視点のあり方を共通に了解しておかなければ、自己表現のみならず、自己実現が不可能になるだろう。

「人らしく、自分らしく生きる」という場合自分自身を把えていることが大前提である。では、その自己をいかに把えるか。今回の「情熱とスペイン舞踏」—感情と表現—においては、自己の感情・気持の把握に重点を置き、「感情」を「喜・怒・哀・楽」の四種に極力限った。自己(の感情)をいかに把えるか、と自分或いは他者に問いかける場合、自己把握の視点のニュアンス(ずれ)を、次のように指摘することができた。

感情の表現をする際の、

1 <感情の場所のずれ>

本人の内なる感情…本人の感じている自分の感情

本人の外なる感情…本人の憶測している一般的感情・他者の感情

2 <感情と表現 (ex. 色) の対応づけのずれ>

同一の感情を味わっているにもかかわらずその表現法が人(国)によって異なる。

1. 言語(表現手段)としての色および現象(表現されている感情)としての足踏み

……色彩 Color による喜怒哀楽 1—(2)

……足踏み Paso による喜怒哀楽

<方法>1) 様々な色模造紙をスタジオの鏡の前に並べる

(黒・赤・黄・緑・青)

2) 『鏡と平行に、できる限り遠方に立って下さい』

3) 『今一番印象的な色、関わりたい色はどれか』(Q1)

4) (Q1)の答え(A1)を各自がきめるまで静かに待つ

5) 『先程習ったフラメンコの手拍子と Paso によって、前方に進みながら、その色模造紙まで近付いて下さい』

6) 『あなたの選んだ色は、喜・怒・哀・楽に相当させると、どの感情が一番近いですか?』全員、立ったまま口頭で答える

注 各自の感情体験(現在・過去とも)に集中させやすい沈黙と一種の緊張感を常に確保すること

<結果> 表2参照のこと

VTRを見る#1 カルメン

<目的> スペイン舞踏における感情表現、喜怒哀楽場面を見る 1—(2) 2—(3)

<方法>1) VTRを見ながら、喜怒哀楽の感情のよく表現されている場面を記録し、その表情を記憶にとどめて置く

2) (Q2)『カルメンという女性を見て、
カルメンの印象は何色か? それは
カルメン自身に表現されるどの感情に近いか?』

3) (Q3)『“カルメン”という映画を見て、
あなた自身が今一番印象的な色はどれか?』

注 (Q2)(Q3)の答え方(A2)(A3)は、各自がスタジオ内に設置した様々な色模造紙の前までフラメンコの Paso をすることで表現する

(Q1)の答え方(A1)参照のこと

<結果> 表2参照のこと

<小講義>

……喜怒哀楽(感情)と色(表現)のずれ(A1より)

……対象とする感情の場所、内と外のずれ(A2, A3より)

即ち誰の感情(自分か他者か一般か)を今問題にし、それをどの様な手段で表現しようとするのか?

2. フラメンコから Paso de Color への導入

3—(1)

言語（表現手段）としての色、及び現象（表現されている感情）としての足踏み
……Paso de Color,

Color de Paso の説明

（新しい概念）

<方法>1) VTRカルメンを見ながら、手と Paso の準備練習及び、Soleares
の部分練習を充分にする

2) 様々な模造紙をスタジオの鏡の前に並べる

（黒・赤・黄・緑・青）

3) 『鏡と並行に、できる限り遠方の椅子に腰掛けなさい』

4) (Q4) 『今日の自分の色はどれか？』

5) (Q4) の答え (A4) を各自が決めるまで静かに待つ

6) 先日から習っている salida ~ llamada までを踊りながら、その
色模造紙まで近付いて下さい』

7) 『なぜその色にしましたか？』全員、立ったまま口頭で答える

注 (Q4) の答え方 (A4) は、各自がスタジオ内に設置した様々な
色模造紙の前まで Soleares の部分 Paso をすることで表現する

(Q1) の答え方 (A1) 参照のこと

注 自分の感情を極力色と舞いで表現するよう導く

<結果> 表2参照のこと

<小講義>

……喜怒哀楽（感情）の相互共存（A4より）

……喜怒哀楽（感情）の表れ方・表し方にみる

言語約束 (ex. 言葉) と表現約束 (ex. 色 Color, 踏み Paso)

3. WORK : Paso de Color 2つの作品作り

4—(2)

言語（表現手段）としての色及び現象（表現されている感情）としての足踏みを、次の
2つの work をすることにより、形として残す。即ち、作品化しておく。

WORK 1 喜・怒・哀・楽の“象徴キャンバス布”作り

WORK 2 自己表現としての足跡

<材料>キャンバス布 (1×1m) / 青ビニールシート

粉絵具+筆+刷毛 約10色分 / ぼろ布

色別ソックス 黒赤黄緑橙青紫白 各2組

絵具溶かしトレイ (直径30cm~片足入る分)

WORK 1 キャンバス布 (1×1m)

WORK 2 色模造紙 約5色分又はキャンバス布

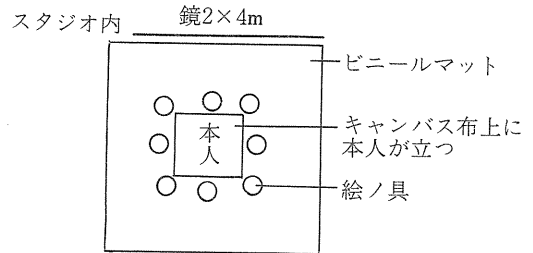


Fig. 2 Paso de Color 設置図

- WORK 1 <方法>1) スタジオの鏡を前にして Fig. 2 のようにセットする
- 2) 各人担当の感情を決め、喜・怒・哀・楽 4 種の感情を象徴する色と足踏みの構想を練る
 - 3) 各人担当の色を決め、その色別ソックスをはき、その色の絵具溶液に片足浸して待機する
 - 4) 2)の担当者の指示に従って、1つのキャンバスの上に、色と足踏みの強弱を残す

- WORK 2 <方法>1) 各自の色模造紙またはキャンバス布を1枚選び、WORK 1 同様にセットし、素足で一人で立つ
- 2) 自分の選んだ音楽をかけ、暫くの間瞑想の姿勢をとる
 - 3) 自分の気持ちや体の動きにそって、色模造紙または布の上で音楽に合せながら踊ってみる
 - 4) その際、絵具溶液を足につけながら、自分の思いを Paso で残す

試み5 Paso de Color の概念及び自己表現プログラムの分析

「Paso」とは、「舞踏のステップ」,「足跡」の意で、動詞 Pasar (通過する、通す、過ぐす)の派生語である。

「地団駄を踏む」ということが人にはある。少なくとも「地団駄を踏む思い」ということは多くの人がもち得る感情体験である。本当に心から怒り、くやんでいる時、人は、顔(のみ)でなく肢体に感情が表現されており、足踏みしているのである。

この場合、Paso は現象であり、無意識に感情が表現されている。感情が意識されていないという点から、この場合は能動的「自己表現」(自己を表現すること)はできない。自己(感情)の意識化や自己把握なしに能動的自己表現は不可能である。

しかし、Paso によって「自己は表現されている」のであるから、受動的「自己表現」は可能であろう。Paso による受動的「自己表現」を足掛りに能動的「自己表現」をいかにしていくか？ 自分の感情に充分気づき、その意味で、「自己把握」し、更に能動的に「自己表現」していくことが本人の Paso を足掛りにしてできるのではないか。即ち、Paso を踏むこと、Paso を踏み続けている間に、自己の中に秘む感情や感情の動きに気づく瞬間・瞬間を体験できるのではないかと推量した。

この「受動的自己表現」としての、もしくは、「表現されている感情現象」としての Paso から自己の感情に気づくというプロセスを『(自己)感情←Paso』と表記する。これに対して、すでに気づいている、或いは、意識した種々の感情やその動きを Paso で表現する(能動的自己表現の)プロセスを『(自己)感情→Paso』と表記する。この二つのプロセスを体験し得るプログラムを創作してみた。

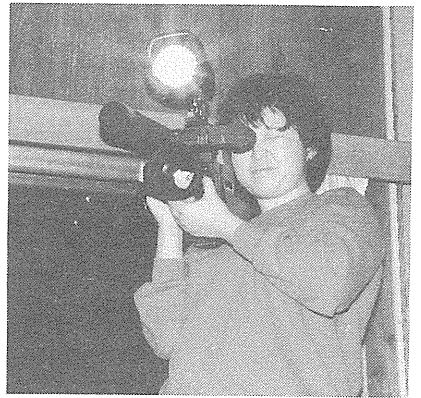
ここで呈示しているプログラムを、上記の「自己表現」という観点から概観して整理すると、プログラム<方法>のうち、質問(Q1~Q4)の答え(A1~A4)の作業は『感情←Paso』のプロセス体験に相当し、以下作品づくり Work 1 の作業は『感情→Paso』のプロセス体験に相当する。Work 2 は、その両方に関わるものであり、ここで指摘した受動的及び能動的「自己表現」を自在に意識化し得る人にとっては、自己発見や瞑想に応用し得ると、私は考えている。

表2 <結果> Color と Paso による参加者の反応結果

| 氏名 | A 1 | A 2 | A 3 | A 4 | | W 1 | W 2 |
|------|----------------------------|-------------------------------|---------------|----------|-----------|-----------------------------|-------------|
| K.O. | 黄(楽) | 黒(怒) | 赤 | 無色 | 今日の気持 | 黒(怒) | 緑 |
| S.N. | 赤(怒) | 赤(怒) | 赤 | 赤 | 憧れ | 紫(哀) | 赤 |
| M.M. | 緑(楽) | 赤(哀) | 黄 | 赤 | チャレンジ | 緑(哀) | 緑 |
| M.S. | 黄(哀) | 黄(哀・楽) | 赤 | 赤 | 喜怒哀楽チャレンジ | 青(楽) | 黄 |
| C.W. | 黒(怒) | 赤(哀) | 黄 | 黒 | 今日の気持 | 赤(哀) | 黒 |
| K.T. | 赤(怒) | 赤(怒) | 赤 | 赤 | 好み外向性 | 黄(喜) | 青 |
| H.O. | 黄(喜) | 赤(哀) | 赤 | 黒 | チャレンジ | 橙黄(喜) | 青 |
| M.H. | 黒(怒) | 赤(怒) | 青 | 黒 | 自分の基調として | 白(怒) | 黒 |
| | 今一番関わりたい色は (その色で表現する感情) | (彼女自身に表れた感情) カルメンという女性の印象は | カルメンという映画の印象は | 今日の自分の色は | その気持は | 担当希望の色 (喜・怒・哀・楽 担当キャンパス) | 自己表現する横造紙の色 |

この<結果>に基づいて感情と表現についての<小講義>を行なった。

Ⅲ VTRを見る



VTRをみる#1 カルメン(前出) 1—(2) 2—(3)

VTRをみる#2 フラメンコ: SOLEARES 2—(1) 2—(2)

及び

フラメンコの修得 3—(2) 4—(1)

<目的>フラメンコの一つである SOLEARES を習得し、スペイン人の感情表現の一例を模倣することによって自己の感情表現方法との相違に気づく

<小講義>

……フラメンコの歴史

……SOLEARES の五部構成と踊り手(私)の解釈

- 1) salida 魂の出現
- 2) llamada 魂への呼掛けと宿り
- 3) cante 調べにのる魂の舞い
- 4) escobilla 魂の躍動
- 5) bulería 終焉

<方法>1) VTRを数回見ながら、SOLEARES の五部構成を知り、ストーリーを各自思い浮べる

2) 私の実演後、ひたすら練習に励む(半日ずつ2日間)

<結果> 5日目の発表式でフラメンコ SOLEARES を舞う。

VTRをみる#3 長嶺ヤス子『まんだら』 3—(3)

<目的>フラメンコやスペイン舞踊の影響の強い日本人舞踊家による舞いを観察し、Paso による感情表現の一例とする

また、自分自身の表現となりうる Paso をVTRより抜出し、模倣する

VTRをみる#4 スペインの祭 3—(3)

<目的>スペイン各地の祭に登場する民族衣装や踊り、人々の感情(喜・怒・哀・楽)などにふれる

VTRをみる#5 フラメンコの祭 SOLEARES (セビリア市) 5—(1)

VTRをみる#6 Antonio Gades『血の婚礼』 5—(1)

<目的>私達の発表を目指して、本場の玄人によるフラメンコの準備風景／化粧場面／楽屋風景を見る

試み6 VTRと鏡の効用 及び 体による自己表現 Expression corporal

視聴覚教材の普及やマスメディアとしての映像技術の発達により、参加者達は知性のみならず感性も鍛えつつ、情報や意図を適確に受授することが要求される。体による表現 *Expresión corporal* は、自己発見・他者発見という人間関係のトレーニングプログラムの一つであり、体の表現の気づきは、自己の魂や意識の発見・気づきに通じる。

VTR を見たり、撮映をし合ったり、時には被写体になったりしながら、五日間VTRを活用した。被写体となる場合、VTR は他者の目、鏡は自分の目として意識され、効果がある。自分を含めて様々な人々の、体全体の動きや舞踊による表現・表情、更には本人が意識していなかった思いや感情の流れ等を把握する助けとした。但し、ワーク中体験される瞬時の変化やハプニング等を貴重な記録・報告として残すためにも、操作の簡単なVTRセットが望ましかった。

IV 発表会：パフォーマンスに挑む

5

<内容>

展示：WORK 1. Paso de Color

喜・怒・哀・楽の“象徴キャンバス布” 4枚

展示：WORK 2. 一人一人の自己表現としての足跡 (Paso) 各自1枚

舞踊：フラメンコ “Soleares”

① Salida ② llamada ③ Cante ④ Escobilla ⑤ Bulería

試み7 発表会：パフォーマンス・人前で自己表現する

自己表現のプログラム化は、決して発表会を最終目標とはしていない。一日一日の各ワークセッションでの自己把握や感情体験を通してその人が自己表現の実在を味わっているならば、その瞬間このプログラムは成就されたことになり、正に自己表現パフォーマンスの瞬間がその本人の中で会得されたことになる。



しかし、本人の中で、若しくはグループの中で成就しているテーマを、目に見える形として残すならば、自他共に「自己表現」というテーマが明確化するだろう。発表会は、今回のワークショップの意図からは、パフォーマンスのほんの一部であるが、大衆の目前での自己表現という意味では、五日間のうちで参加者にとって刺激の大きい一日となった。

V ふりかえり用紙の作成

1～5

—— スペイン村での1日の ふりかえり ——

12がつ _____ にち _____ ようび _____ てんき _____

1

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|---|---|---|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|

2 今日あなたの色は何色ですか？ また、どんな形ですか？

| | | |
|--|--|--|
| | | |
|--|--|--|

3 今日あなたはどんなことに気付きましたか？

4 学んだこと

5 明日、またはこれから、どんなことがしたいですか？

試み8 色彩で回答するふりかえり用紙の作成

一日のふりかえり、及びワークショップ全体のふりかえりのために、主に色彩 color で答えるふりかえり用紙を学生と工夫して作成した。これは、五日間の感情と表現の視点を限定する（試み3・4）上で役立った。

以下、参加者の声を載せ、今回のワークショップの収穫と反省材料とし、今後の人間関係研究等におけるプログラムの発展につなげたい。

<参加学生8人の声>（ふりかえりより）

——感情と表現の学び——

- *感情やイメージを色彩として表現することは、以前から、小説を書く前の手法で用いていたのでやりやすかったが、好きな色と自分の色がちがったことだけは認めなければならないみたいです。きれいなブルーのフェルダで踊ってみたかったな（K.T.）
- *表現することのおもしろさ、楽しさ、喜びをぞん分に味わうことができたと思う（M.M.）
- *喜怒哀楽の感情を1つずつおさえていくと日常の自分の感情の動きが明確になってくる（M.M.）

— 発表後 —

- * 5日間足らずですてきな発表会ができたこと、とても心にのこりました (K.O.)
- * 人前で表現 (自分を) することの恥かしさはたまらないが、終わったあとの気分は極上だと思う (M.M.)
- * 思ったほど燃えることができなかった。夜1人でレッスン、とか考えてたもんね。でも、発表会はひさびさに心地よい緊張感を覚えてしまった。……控室はめっちゃめっちゃかっこよかった。満足 (M.S.)

— Paso de Color —

- * Paso を布にえがいたりするのは考えていたよりひどくおもしろかった (M.M.)
- * “Paso” は初め気がすまない作業だったけれど、やりはじめるとおもしろい。やはり形として残るものは何か必要だと思います (S.N.)
- * 今思うと5日間の感情の波を感じることはできたと思います。が、それをスペイン舞踏に表現するのは……私は60%ぐらいかしら…… (K.O.)
- * Paso づくりとかはあまり好きでなかった。が、やるときはけっこう楽しんでた (M.S.)

— 自分の発見 —

- * 私はとても興味をもって参加しました。……今一番興味のあるスペインのことも知ることができたし、とても有意義でした。これきりにしたくない。「……スペインに行きたい」 (S.N.)
- * 振り付けをしてもらう時、自分の体が意のままに動かないことが、ひどく苦しかった (M.M.)
- * 他のワークショップと比べて私に合っていたようである。今までフラメンコという少々受け入れがたいものがあったけれど、この5日間で少しフラメンコのイメージに近づけたと思う (H.O.)
- * フラメンコのイメージが身近にはっきりとわかってきたように感じる (C.W.)
- * 毎日を動かすことができよかった。もう一週間くらいやってもいいなあと思った (H.O.)
- * 一週間大変楽しかったです (O.W)
- * ……しかしとても楽しかったです (H.O.)
- * 型やステップよりも、リズムや感情表現がとても身になじんだような気がする (今でも三拍子が抜けない状態) (C.W.)
- * 「スペイン舞踏」より先に自分の中で葛藤ができてしまって、それを解決するのに2日もかかったのです。それをのりこえられたということはすごく満足しました (K.O.)
- * 体を動かせてよかったけれど、私の自己表現はやっぱり小説や音楽や絵みた

いな方に近いようです (K.T.)

—プログラム—

*練習には熱くなって打ちこめたと思うが、ずいぶん忙しい感じだったなと思う (M.H.)

*……なかなかバラエティに富んだ内容だった (C.W.)

*やはり、初日か二日目のうちにみっちり基本(ステップ)を通しておいて三日以降に自由時間を入れたのがよかったと思う (C.W.)

*** 感情と表現ワークショップを終えて ***

人間としての真の喜・怒・哀・楽とは何か。人は生涯の中で、本当に喜び、真に怒り、哀しみ、楽しんでいうことをどれ程体験し、気づいているのだろうか。ワークショップ後、皆が“本当に楽しかった”と口ずさみ、事実彼女達は本当に楽しそうだった。私自身も楽しかったし、幸せだと感じる時が重なった。もちろん“楽”だけを善しとしているのではない。ネガティブな生の感情も含めて今の自分を知ることが善しとしたいのである。

自己を知る、そして、人の中で自己・他者、更にその交わりによって創られる新しい自己・他者に気づき共に生きていく。人が人を知るとは、人が人らしく生きるということと同義であろう。人(己)が人(己)を知れば知る程、一過性の厭世的態度に陥ることはあっても、知れば知る程、生き生きと、ありのままに生き、人生に寛容になったり、楽観的態度に変容していくのではないか。

スペイン人は楽道家が多いと言われる。表面的な明るさではなく、又、円滑な人間関係をこなすテクニックとしての明るさではなく、その人の人生の今この時点での確固たる「人間観」に裏打ちされた「明るさ、楽天性」なのである。一方、日本人の間で、日本の組織化された管理社会での人間関係は、人間性に不自然さをもたらしている印象をもたれがちである。

今回ワークショップ参加者は、短大生(18~20才)であり、自分が日本人であるという自覚にまだ充分さらされていない。いわゆる異文化に接するのはこれからであろう。このような参加者に対して、各自の自分らしさを何も無理に日本人らしさと結びつけるよう強要するつもりはない。むしろ、自分らしさはどのような文化圏の中に見出しやすいかを自由に試行錯誤できる環境やチャンスが多く与えられることが、「本人の自己の文化を知る(もしくは)築く」上に重要である。

自分自身が真に人間として成長し、より人間らしく自分の人生を生きていくためにも、人間として心も体も充分に生かしてほしいという願いが強められた。この五日間の「自己表現」ワークショップの中で、自分の中にも、人の中にも生じ得た喜・怒・哀・楽の真偽に敏感になりつつ、真の自己表現を今後も探って参りたい。

* * * 謝 辞 * * *

ワークショップ「情熱とスペイン舞踏」の初めての実施に際し、様々な分野の方々のご協力・ご援助を頂きました。

この企画を生み出す好機を与えて下さったスタッフ：Glover 俊子氏，W.S. コーディネーター：山口真人氏，Soleares 振付・衣装提供：松下幸恵氏（'75 英語科生，フラメンコ舞踊家），吉川哲夫氏（大阪スペイン企画主宰，ギタールリスト），スペイン資料収集協力：Caridad Nuñez 氏（南山大イスパニア学科教授），坂本泰孝氏（'85当センター講座生），白木眞氏（名古屋 La Mancha 店主），スペイン政府観光局（東京），資材購入準備：人間関係科及び事務室渡辺みどりさん，大塚弥生さん，寺西佐知代さんの皆様に対して，更に，この創作プログラム試行の推進力となって下さった参加学生 8 人の皆様に対しては一人お一人の表情と舞いを清里の星空に思い出しながら，ここに謝意を表したいと存じます。

今回のワークショップの記録・報告として，主な活動をVTRに収録し，VTR「情熱とスペイン舞踏」（20分）を編集した。製作：12期生，和田・岡田・丹下・服部。尚，13期生，大竹・中村・松浦・鈴木(真)うち先3名は2年次卒業研究「魅力ある言葉（夕鶴公演）」で自己表現も学びつつ活躍した。

ワークショップ6

絵本づくり—誕生—

文 珠 紀久野（純心女子短期大学講師）

はじめに

ワークショップ合宿『絵本づくり—誕生—』をするにあたって、学生各自の内なる表現力を開発し、より発展させることを第1のねらいとし、作業を通して互いに協力することを第2のねらいとした。

副題を『誕生』としたのは、1つには合宿時期がクリスマス前であったことから、イエズス・キリストの生誕を共に考えてみようとしたことである。2つ目の理由として、創ろうとする絵本は子どもを対象としたものであるため、子どもの誕生をどこかに織り込みたかったことがあげられる。

さらに『誕生』を広くとらえ、自らを変化させること、表現力を開発すること、絵本づくりを通して自分の成長・発展をはかることもねらいの1つであった。選択の条件として、子どもに興味・関心があること、フィールド・ワーク、各論の授業などを通して幼稚園児程度までの子どもと遊んだ経験があることが1つである。

『絵本づくり』において絵を描くことは必要な要素であるが、絵の上手・下手にとらわれ、自分には出来ないと思い込んでいることから解放されればよいと考えた。そこで、絵や文章表現能力に自信が無くても、互いに援けあってゆくことにより『絵本づくり』が可能であり、選択における絶対条件ではないことを伝えた。

計画・準備

○合宿前準備

第1回オリエンテーションでは、『絵本づくり』を選択した理由、『絵本』

について知っていることはどのようなことであるのかを尋ねた。

「絵本が好きで一度作ってみたかったから」、「子どもに夢を与えたいから」
「童心にかえてみたいから」という理由が主であった。

知っている絵本は、「ピーターパン」・「白雪姫」・「バンビ」などの物語絵本、
「ぐりとぐら」シリーズ、ブルーナのシリーズであった。幼い頃どのような絵
本に接したのか記憶のうすれている学生もいた。

次回までに絵本専門店で絵本を見てくること、『誕生』がテーマになった絵
本を一冊求めてくることを宿題とした。

第2回オリエンテーションでは、持ってきた絵本を互いに見せ合い、分かち
合い、自分が創ろうとする絵本の大まかな構想を話しあった。

絵本製作に必要な材料(表1)、絵本、絵本創りのための本や資料、音楽テー
プ、VTR、聖書を準備した。

絵本製作の過程(表2)を説明し、各自が一冊づつ創ることを前提として、
自分なりに仕事の手順を考えた。

表1 材 料

| 材 料 | |
|--------------|--------------------------------------|
| ケント紙, | ポスター・カラー, 4Bの鉛筆, ブッカー(製本用), 絵具, |
| クレヨン, | 色鉛筆, コンテ, マジック(大, 中, 小, 極細), 色紙, 和紙, |
| ヤックマン, | 筆, パレット, バケツ, 細目の網, ナイフ, カッター, モール, |
| トレーシング・ペーパー, | ビニールシート, マジックテープ, ファスナー, |
| ボタン, | ハサミ, ハギレ, ビーズ, 鈴, ロウソク, パンヤ, はとめ, |
| 手芸用ボンド, | フェルト, 布類, 針, 糸, スパンコール, ビーズ |

表2 絵本製作の予定表

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|--|---|-------------|-------------|------------------|
| 朝 | | | 下 絵 | 色つけ 文字入れ | |
| 昼 | ス ト ー リ ー づ く り の 構 想 を 練 る | 分 か ち あ い | | | 原 画 完 成 |
| 夜 | | ミ ニ 絵 本 を つ く り 全 体 を と ら え て み る | 下 書 き | | 発 表 |

合宿に入って

○初日～2日目

持ってきた材料・道具・絵本類を整理した後、各自の絵本や準備してきた数多くの絵本を読み比べた。自分の創ってみたい絵本のイメージに近い絵本を取り上げ、構想を各自練った。

その際、対象者は誰であるのか、ストーリーはどのようにするのか、その中心テーマは何か、ページ数はどの程度にするのか、絵本自体の大きさ、文字の大きさ・量・配置はどのようにするのか、右開きになるのか左開きになるのかといった点からも考えてゆくように助言指導した。

学生は、美しいもの、夢のあるもの、ほのぼのとしたものといったイメージの絵本をつくりたいと考えているようであった。

絵本は紙以外の素材、例えば布を台紙としフェルトを使用したり、ビーズをつけてみるなどして、子どもの五感に働きかける絵本も可能であることを伝えた。

いよいよ型紙づくりである。ミニチュア版の絵本をつくってみて、全体がどのようなようになるのかを検討した。

ページ数の極端に少ない人に対しては、ストーリーの展開を再検討すること、素材を工夫してみることなどの助言を一人一人の状況に合わせて行った。

○2日目～3日目

型紙が出来上がった人から台紙―ケント紙―に下書きを始めた。個人作業であるため一人一人のペースが異なり、構想を練るため散歩に行く人、下書きが順調に進んでいく人、夜中まで取り組んでいる人など様々であった。

3人の2年生と8人の1年生との間では、まだぎごちないやりとりであり、互いに影響を及ぼし合うことも少ない状況であった。

○4日目～5日目

下書きの出来た段階で、絵具・色鉛筆などを用いて色つけ、文字の書き込み作業を行った。5日目の午後には、全体会での発表準備を行った。

ほとんど製本まで出来た学生もみられたが、大抵は製本直前の原画のままであった。それらを1ページ毎にテーブル上に並べ、他の学生達に見てもらい感想を聞いた。

「かわいい」「きれいだ」「うまくできている」という言葉に学生達は励まされたようであった。

発表会后、ふりかえりを行ない、互いの絵本の批評会を行った。

学生の反応 —ふりかえり用紙から—

○オリジナリティの面からみて

ほとんど模写したという学生から、自分らしいものを創ろうとした学生まで幅があった。

7段階でオリジナリティ度を評定したところ、平均2.8でかなり模倣程度が高いといえる。

○ストーリーの展開

既存の物語を使った学生から、自分なりにストーリーを展開した学生まで様々である。学生自身による評価では、平凡・単純・あやふやな展開になっているとみている。

○表現力の開発

自分の内なる表現力が開発されたというよりむしろ、根気よく取り組めたという点に学生達は驚いている。ある学生は、作っていく内に新しいアイデアが次々とうまれてくるという体験をもったという。

今回つくろうとした絵本の模倣度が高かったためか、表現力を開発するという点では不十分なままに終わったといえよう。

○協 力 面

個人作業であったため、他者との関わりは具体的な行動となってあらわれることが少なかったようである。

「1年生は2年生に、2年生は1年生に気をつかっていた」、「一人一人の取り組み方の違いが分かった」というように、各自は他のメンバーの動きを十分に観察していたとおもわれる。

考 察

絵本は近頃若い女性に人気が高いといわれる。書店においても絵本コーナーには子どもよりもむしろ20歳前後の女性が群がっているのをよく目にする。彼女らにとって、メルヘン的な世界にふれることは現実の厳しさから一時でも解放される時なのであろう。

子どもが好む絵本と、大人の好む絵本はかなり異っている。例えば、いわさきちひろ氏の絵本は若い女性には非常に好まれている。しかし子どもにその本を与えても大抵の子どもは見向きもしない。淡いタッチが子どもの感性に訴える力として弱いからである。むしろ子どもは、単純なくり返し、単純な絵、はっ

きりした線をもつ絵本に興味をもち、何度も開いては、体中で喜びをあらわす。

『白くまちゃんのホットケーキ』（ホルブ社）では、子どもは自らが絵本の世界に入り、白くまちゃんとともにホットケーキを作り、1つ食べ、2つ食べ、「ああ満腹」と言いつつ主人公に同化する楽しさ、喜びを味わうのである。

『絵本づくり』を行なう際、子どもを知っているかどうか、多種の絵本に接したことがあるかどうか、つまり作り手側に子どもの日常生活はどのようなものであるのか、子どもが何に興味をもつのか、子どもが喜ぶのはどういうときか、子どもは絵本とどのように関わっているのか等々、どのような体験をもっているかによって出来上ってくる絵本がずいぶん異ってくるといえる。

女子学生に「最近1週間ないし1ヶ月の間に小学生以下の子どもと接したことは？」と尋ねると、全くといってよいほど子どもと遊んだり、子どもと話をしたり、子どもの世話をするという経験をもっていない。さらには、彼女らが成長してくる過程においても、子どもと関わる経験は非常に貧弱なものでしかない。

このような状況において、絵本づくりをする前に子どもと関わる経験を少しでももたなければ、「子どもを対象とした絵本をつくる」といっても仲々理解しがたいものとなり、とうてい作り得ないと思われる。

また絵本といっても、大きさ、形はもちろんのこと、ストーリーのあるもの、ないもの、文字のあるもの、ないもの、単色のもの、多色のもの、内容においては、子どもの夢、子どもの生活、動物など種々様々なものがつくられている。

今回のワークショップ合宿においての1つの問題点は、事前の準備期間が少なかったため、子どもに接するチャンスを得られなかったことがあげられる。そのために、彼女達は自分の興味の範囲内で製作にかかったといえる。

また、事前の宿題は絵本専門店に行き、多くの絵本に目を通してくることであった。同時に子どもたちがどのような絵本を手にとっているのかも観察してくるよう指示をした。

その上で一冊絵本を選んでもってきたのであるが、彼女らが選択したものは、前述したように、いわゆる若い女性の好みで選ばれたものであった。

合宿に入ってから多種の絵本にふれたのであるが、初めに選ばれた絵本をモデルにするという彼女らの枠組には影響を及ぼさなかったようである。

前回の8期生ワークショップ合宿においても同様の絵本づくりを行った。その際と今回の違いをみてみたい。

前回の絵本づくりにおいては、15名の学生とともに5冊の絵本をつくった。出来上がったものには学生達の工夫が十分みられ、オリジナリティの点でもすぐれていたといえる。

事前の準備としては、子どもの大まかな発達像を学内において学習した後、子どもが好むであろうとおもわれる絵本を1人1冊ずつ持ち寄って保育園へ行っ

た。2歳～5歳の子どもたちに自分のもっていった絵本を読み聞かせ、反応を確かめてみた。

子どもたちが目を輝かせて聞いてくれるのは、どんな時でどんな箇所か、自分にとって好ましい絵本でも子どもは喜ばない、単純なものに反応があるなどの手ごたえを感じられたのはよい経験であった。

さらには、絵本専門店において、「子どもが好む絵本とは？」のテーマで話を聞き、実際にそれらの絵本を手に取り読んでみた。

この点において、今回の場合、準備不足であったといわざるをえない。子どもと触れあう機会も経験もなく、子ども対象の絵本をつくろうと働きかけても、子どもがどのような存在であり、子どもは絵本とどう関わり、絵本に対して子どもはどのように反応するのかといった点に関し、生き生きとした手ごたえなしに絵本をつくるには困難がきまとうといえる。

さらに前回は、互いの興味関心を出しあった後、小グループ（2～4人）に分かれ、そのグループ内での話しあいから1冊の絵本をつくっていった。

グループ作業では、互いの知恵を出しあい、アイデアを拡げ、深めてゆくことが1人で行う時よりも十分にやれるといえる。そのため、始めに考えた案以上のものがつくられていった。構想を練るところにかける時間も、前回は今回よりも1日多くとりグループでの話しあいをじっくり行った。このことが内容の深まりに影響を与えたと思われる。

個人作業と比べグループで行う場合、自分勝手な行動が許されないという制約がある。そのため、普段以上に自分のエネルギーを出さざるをえないこともあって、しんどさを感じた学生もいた。反面、話しあいをつづけることにより、アイデアを次々と出せるという事、励ましあい協力しあえるという面も大きい。「1人でならやれないが、メンバーがいたから自分もがんばれた」「自分の力を確認した」という喜びを伝えてくる学生もいた。

今回の場合、1人で1冊つくっていく際に他のメンバーに働きかけ、助言をもらったり、アイデアを交換するという相互交渉が非常に乏しかったといえる。

また、学生の動機や熱意によって作業への取り組み方が大きく異なり、ある学生は徹夜を続けても作っているのに対し、少しやっては遊びに出るという学生もいた。その結果として、出来上りに大きな差がみられた。

学生にとって『絵本』をつくることははじめての経験であった。それだけに、作れるだろうかという不安感は大い。字がへただから、絵が描けないからといった自分の能力への懐疑もあり、しりごみしがちである。

グループでつくる場合、各自がもっている才能を互いに提供し、生かしあうことができる。多様なリソースが存在するからである。

お互いの出来ることを提供することによって、1つのものが次第に形づくられてくるという経験は、学生にとり喜ばしいことであり、嬉しいことである。

それが徹夜をしてでもやろうという意欲に結びつき、更には、合宿後も絵本を完成させるために集まる力となったとおもわれる。

ところが、1人で1冊作っていくときには、1人で全てのことをしなくてはいけないという圧迫感の方が、喜びよりも強くあり、やる気が徐々に消えていく学生もいた。他のメンバーもがんばっているからという思いをもった学生は、自分もやろうとし、共に励ましあえたときもあった。

スタッフとしては技術的な援助よりも、1人1人の持ち味をどのようにして引き出し、イメージとしてもっているものをどう具体的な形にあらわしていくかということと、作業を進めていく上での心理的援助が重要であると感じられた。

学生の中にあるイメージは漠然としており、それを具体化したときは単調・平凡なものになりがちであった。共にあれこれ考えながらイメージを上げふくらませていくことによって、学生の内部に、おもしろそうだ、やってみよう、字も絵も下手だがつくってみようという意欲がわいてくるようであった。

下書き、色つけと進むにつれ、学生のしているかたわらで見守っていると、必要最小限で声かけをすることが学生を支える力になっているようであった。

ともすれば、「適当にやろう」「早く簡単にしてしまおう」となりがちであった。その場で共に悩み・工夫することによって、「もう少し工夫しよう」「手を抜かずにやろう」となってくるようであった。

学生の反応にもあったように、表現力が開発されたというより、むしろ、1冊のものをつくりあげた喜びと、自分にもやれたという実感、根気が自分で思っていた以上にあったという確認ができたことが今回の合宿の成果ではないかと思われる。

